明治三十年十月五日發行

女鑑

第百四拾二號

東京國光社

女鑑第百四拾二號

目録

大宰春臺の母



時間を正しうすべし

朝夕の起臥、飲食、日毎の業務、すべて、事毎に、人は、常に時間を正しうすべし。その身のきは、その家の營みによりて、起くべき時、臥すべき時をはかり定めて、起くべき時には、必ず起き出づべく、臥すべき時を待ちて、必ず臥すべし。飲食も、また、同じく、食ふべき時を定めおきて、その時々にこそ食ふべきなれ。日毎の業務も、また、然り。營むべき時を定めて、その時間のほどは、必ず勉め營まざるべからず。斯く時間を正しうせざれば、或は身をもちくづし、或は身をそこなふもとと成ることはもとより、また、勉強もなか〳〵に、そのかひなきことあり。われ〳〵の一身は、やがて、一個の器械なり。すべて、器械は、これを取り扱ふに、定まれる規則ありて、それに從ひて、正しうこれを取り扱はざるべからず。然

らずして、不規則にこれを用ひ、みだりにこれを扱ふ時は、よく其の器械を運轉する能はず、よくその器械の効を奏する能はざるなり。否、よくこれを運轉するを得ざるのみならず、これが効を奏せざるのみならず、全くこれを破りて、また、用ふるを得ざるに至るべきことは、百般の器械、皆然り。吾人の身体も、また、一個の器械なれば、これを不規則に用ひ、これを猥りに扱ふ時は、よく動き、よく働くを得ざるのみならず、終には、これをもちくづし、これを破りそこなふに至るべし、されば、起臥に、飲食に、業務に、時間を正しうして、我が身を取り扱はざるべからざるなり。

朝夕の起臥、その時を定めずして、唯、我が心の欲するまゝにまかせて、不規則まのみ起臥してあらむには、自堕落といふ恐るべき淵に陷らざるを得ず、はては、それより、世に用なき怠惰者とも成りはつるに至るべし。また、さばかりにあらずとも、かゝる人は、閒なく進みゆく社會に立ちて、到底誠の活きたる人となりて、敏捷に動作くを得ざるべし。

飲食は、我が身を養ふものにして、極めて、大切なるものなり。されど、その時を定めずして、欲するにまかせ、あるにまかせ、みだりにあらむには、なか〳〵に、我が身を破るもとなり。なほ、汽罐を動かす火力の如し。みだりに、不規則に用ひたらむには、その効力を減ずるのみならず、その汽罐を破るに至るにて知るべし。

日毎の業務を營むにも、また、その時間を定め置きて、その時間のほどは、それにのみ我が心を盡くして、勉め勵むやうにせざるべからず。わが業務を勉強するといふは、もとより善事にして、終日常に勉強することを得ば、誠にこの上なき善事にはあれど、人の氣力は、限りあるものにして、終日常に勉強するといふことは、決して、望むべからざることなり。よしや、一日二日は、強てこれを爲すを得るとも、決して長き日月にわたりて、よくこれを行ふ能はざるべし。人の氣力は、限りあるものなれば、その氣力をはかりて、その氣力に適したるほどの時間を定めて、その時間のほどは、充分の氣力を以て、その業務を勉強するやうにせ

ざるべからず。而して、長き日月にわたりて、いよ〳〵其の業を勉めゆきて、其の業に上達すべきやうに心懸けざるべからず。

よく物に上達する道は、日毎の勉強を、長く積みゆくにあり。日毎の勉強は、終日の勉強にあらず。唯、定時間の間、充分の氣力を以て、一心にその業を爲すに在り。如何となれば、吾人の氣力は、限りあるものなれば、長き時間にわたるを得ず。されば、吾人の氣力に適せる時間を定め置きて、日毎に、充分の氣力を以て、一心に其の業に從事すべきなり。充分の氣力を以て、一心に從事する勉強にあらずは、いかに勉強するとも、つまりは益なき勉強なり。されば、かくの如く、時間を定めて、日毎に勉強するこそ、眞の勉強といふべけれ。

斯く、時間を正しうして、起臥し、飲食し、勉強しゆかば、此の間なく進みゆく社會に立ちて、よく誠の活きたる人と成りて、敏捷に、活潑に、思ふまゝなる、あつはれめでたき動作を爲すを得べきなり。我が國の人は、かゝる點、にやゝ不規則なる如きけしきあり。大かたの孃たち、心してよ。



論説

女子の體育につきて

加茂之満

語に曰く、活潑なる精神は活潑なる身躰に宿る。と、誠に宜なる言なり。智育にもせよ、徳育にもせよ、完全の發達を望まゞ、必先づ健全なる身体を要すべし。たとへ、徳操如何に高きも、智識如何に勝れるも、常に病床に在りて、薬餌を友とする身は、將た何にかはせん。されど、三育の内にて、躰育の最重んずべきこと素より論なし。然るに、男子に在りては、各種の体操、柔術、撃劍、角力、等、随意の方法によりて、充分に之を施すの道ありと雖、女子に在りては、未だ如斯適應せる方法も見ず。加之、從來我が國の風俗として、女子は多く深窓の内に閉ぢ籠り、戸外に出ることも稀なる如き有様なれど、体育の道は、殆ど全く開けずともいふべく、適〻或る一部の女學校にては、体操を課すと雖、これとても、只儀式的の事にて、何程の役にも立つものに非ず。元來學校のみにて、充分の体育を施さんとするは極めて難きことにて、少し許り、號令に

從ひて、手足を動かし、頭をふり廻すとて、思ふ程の効あるものなるや否や、いとおぼつかなし。よりて、先づ學校にては、女子の腦力を量りて授業時間を加減し、及ぶたけ運動の方を採りて、發達せざるまでも、之を沮碍せざらん樣に務むべく、之と仝時に、他方には、女學生自らは元より、之が父兄たちも、是に心を留めて、家庭に於て充分の發達を促さゞるべからず。

下等社會の女子に在りては、衣食に汲々たるを以て、望まずとも勞動せざればならず、故に滋養の食物は、不充分なるにも係はらず、常に身体は健康なり。之に反して中流以上の女子は、多く座食の徒にして、所謂、重きものは箸より他に持ちたる事なしといふが如く、働かざるを以て名譽の如く考へ、身躰の孱弱に流るゝ事をも顧みず、徒に勞動を賤しきものゝ樣に思ふ輩も多かるべし。世々之を以て風となし行かむ、我が國人の軀格は漸次倭小になりもて行かむこと、いと、氣遣はしき限りなり。現に、歐米各國人に比較して、我が國人の倭小なるは、如何にゝ口惜しきことならずや。「人肥えたるを以て貴しとせず、智あるを以て貴しとす」といふとはいへども、身体偉大にして、而かも智德の兼備はらむ、また此の上やはある。父母たちも、孃だちも、ゆめ体育をな忽にしそ。

今、余は是等の中等以上の女子に向て、最良の方法により、充分なる身体の運動を進めて、完全なる体軀の發育を望まんとす。そは、まづ、如何ほど貴顯の家にうまれたらん女子にもあれ、如何ほど富有なる家におひたゝん女子にもあれ、朝は必ず奴婢と全し時に起き出でゝ、室内の拭き掃除などを務め、炊事も出來得る限り奔走して、力めて身体を使ふことを考へ、學校に通ふには、素より寒からんも暑からんも、必徒歩にて昇降し、忘れても車などに乗ることなく、其の他家の使事などにも、自ら行くべきは自ら行きて用を辨ずる樣にし、尙、足らざらば、郊外に散歩して精神の爽快ならんことを求むべきなり。富貴の家に生れたる女子は、掃木一本手にしたることも無く、雑布のかけ方も知らず、飯の炊き方も、綻の縫ひ方一つも心得ぬ女子多しと聞く。是等は唯に身体の運動を缺ぐのみならず、第一女子の女子たる職務を知らざるものなれば、完全の女子とはいひ難く、片輪ものと言はるゝも免るゝ方なきことなり。元來、女子が拭き掃除、炊事、走り使等を、賤しきことの樣に思ふは、大なる間違にして、たとへ家は富貴ならんも、斯ることは、女子の天職と思はざるべからず。婢あまたありて、是等の業に差し支ふることなしとも、自ら卒先してつとめいそしめば、獨り躰軀の發育を促すのみならず、亦一家の美風ともなりぬべし。余が、女子体育の方法として此等の事を撰

む所以も、亦實に是によりてなり。

又食物の如きも、如何ばかり滋養分を食ひたりとて、之に適ふだけの運動をなさゝれば、何の營養にも成るものに非ず。余近き頃、女子高等師範學校長なる秋月新太郎氏を訪ひし折、氏は、種々教育上の意見を物語りて、終りに、躰育につき次の如く云はれたり。「今の學生が、男でも女でも、身躰を充分に働かすといふことをせないのは實に惡はことです、そして食物などは、牛肉や豚肉を無暗に腹に詰め込んだり、やれ今朝は牛乳を幾ら飲んだからよろしい、今夕は鷄卵を幾つ食つたからよろしいなどゝ、一日下宿屋の二階かなんかでごろ〳〵して居て、それで衛生だなどゝは、實に片腹痛い話です、牛肉や鷄卵を幾つ食つたから夫で身体が丈夫だなど思ふは大變な間違で、これらはみんな身体を害すもとなのです、夫といふも、皆が、鷄卵を飲み牛肉を食へば、夫ればかりて体の養ひになるといふ考へで、ころ〳〵寝て居てろくな運動もしませんから、どんなものでも一つも身体の養ひにはなりません、反りて胃や腸を害ふのです。私などは、若い時分は、随分荒いことをしたもので、寒中袷一枚で、朝は三時頃から起き出して撃劍の稽古をしました、それで、食物も極く粗末なもので、魚なんどはめつたに食ひませんでした、今でも矢張り、麥飯に味噌汁の樣なものをやつて居りますが、瘠せ

て居ても六十前後の此の年で、なか〱まだ丈夫であります、牛肉なども時には食ひますが、何も滋養になるからといふ譯でなく、唯甘いから食ふのです。」云々、と。諸孃試みに、田舍の農夫は、常に如何なるものを食ふかを思ひ見よ、牛肉やそつぷなどは口にせしこと無きが多かるべし。麥飯に野菜は彼等の常食にして、別に取立てたる滋養分を食はざるも、しかも身躰の健全無病なること、肉食甘味に飽く都下の孱弱人士と比ぶべきにあらざるべし。これらは新鮮なる空氣を吸ひ、或は頭腦を勞すること少しなどいふ種々なる原因あらんも、充分の運動をなすといふこと最も大なる原因なるべし。運動は常に身体の最良藥たるなり。されどとて、余は、女子が男子と仝じ樣に、獨りにて思ふ儘に、其處彼處飛び歩きて運動することを望むに非ず。唯前述の方法により、適度の運動をうながすのみ。

尙、女子が身体の孱弱は、唯其の人一人に止まらず、實に一國の國民をして、將來に孱弱ならしむることを思へば、憂慮忡心置く能はず。之が發達進歩を謀るは、實に、目下の最大急務ならずや。余は、世の人が、今少し此の點に心を染めて、女子の体育に重きを置かむ事を希ふて止まざるなり。

女子教育一斑（五十）

三輪田眞佐子

裁縫

詩に曰く、婦無公事。と、今日とても、なほ、女子は内事を治むべきものなり。さて裁縫は、内事中の主なるものなれば、貴賤ともにそのわざを知らざるべからず。一家の主婦たるもの裁縫の藝に巧みなれば、家族擧りて四季に適ふ衣服を纏ひ、一門の風采を高め、亦經濟にも益あるべし。しかのみならず、良人も、その衣は妻の手によりて成りしと思ひ、兒童も、この服は母の勞を蒙りしと知らば、あるは妻を愛し、あるは母を敬する感情、ひとしほ濃かなるべし。

かくばかり必要なる裁縫をば、學事に志す女生は、數ならぬものと見なし、心をこめて學ばざるより、異日一家の主婦となり、初めて狼狽する失態の例も、世に少からざるとぞ。これに反して、極端に走り易きは人の弱點なればにや、女子は、裁縫だに學ばゞよし、學術などはせずもがなとそゝのかすものもあり。されど、手藝にのみ志して、腦髓を訓練せざるときは、萬事痴鈍にして、なか〳〵複雜なる文明の世に立つこと能はざるのみかは、見聞低きより、劇場などの卑野なる俗話を好み、おのづから、坐臥進退も高尚ならざるに至るべし。たま〳〵、生れながら品格高き女子は、針事のみを教へんとて、容易に弊害は生ぜざれども、かゝる教育の女子は、なべて見劣りせ

らるゝは事實なり。故に、裁縫を顧みざると、裁縫のみを專にするとは、共に女子教育の道にあらざるべし。

元來裁縫は、熟錬を要するものなれど、學校にのみ委ぬるも、到底實地に應ずる難からむ。思ふに、學科と同時に、裁縫を學ばんとならば、運針を勉むるのみならず、裁方縫方の法規を學問的に筆記して、他日の備忘になすべし。故に、學校の裁縫教師は幾分の學識ありて、學術的に規則を教ふる力なくば、必學科の思想に富む女生を満足せしむること能はざるべし。さて、熟錬の道は、家庭と相待ちて成功すべきものなるに、世人は、學校に嬢妹を托すれば足るものと思ふにや、更に庭訓を顧みざるめるこそ甚しき謬見なれ。おのれ、女子教育は、學校よりも家庭に重きを置くべしと信せり。

されど、學校に於ても、及ぶ限りは、裁縫の熟達をはかるべし。されど、他の學科と比較して、授業の時間を定むべきものなれば、毎週三時間、若くは四時間の授業をなす外ぞなき。おのれ、幼きころ、讀書のみをもて教育せられしかば、裁縫のわざは、僅に聞きしのみなれども、わが家族の裁縫ばかりは、未だ他人の手を求めしことなし。今や齢に富み、且つ多忙なれども、なほ、家熟の模範にもと思ひて、おのれの衣帶の

みは手づからものせざることなし。故に、おのれは、經驗上裁縫はど容易きものはなしと信じぬ。蓋、そは多く取扱ふにあらざれども、熟達せざるものなれども、家庭に於て、餘力あるものは、裁縫をつとむるのみならず、學校に於ても、教師の臨時に欠席せし時間などには、熟習せしむべし。尤も材量なきときは、雛形にても可ならむ。實に今日の學科は、その種類多きを以て、光陰を儉用する外ぞなき。

裁縫と共に修むべきは、編物と刺繍なり。編物の實用上著しきものは、靴下、手袋、及び、肩掛などなり。刺繍も、畫と相待つのみならず。なべて、多くの時間を要し、視力も勞すべきを以て、完全なる技術は、そが專門の學校に於て學ばざれば能はざらむも。簡單なるものは、普通の女學校にても修め得ん。さて、これらも熟練を要するは勿論なれども、時間なきを以て、法則なりとも廣く學び、他日實地の女業を執る準備となすべし。由りて、裁縫の科程中に、編物刺繍を含ましむべし。かくては、いよ〳〵規則のみを知るに過ぎざれども、實地に益なしとて批難するものあらんも、一擧兩善の策なきことと止むを得ざるなれども、熟練は家庭の力を恃むべきなり。女子家庭教育の責任ある父母たち、思はざるべけんや。

家政　一國の政が複雜なるごとく、一家を治むるにも、種々の慮なかるべからず。

故に、家政の任ある主婦たるものは、家庭思想を養はざるべからず。然るに、世人は學校にて教育せられし婦人は、家族の風波を起すのみかは、洒掃應對宜しきを得ずして、良人は怒り、舅姑はつぶやき、婢僕さへのゝしり、果ては乾燥無味の家庭を作るもの多しと評するとかや。兎まれ角まれ、かゝる婦人は、人生の幸も、教も、將た樂も、一切家庭に潛むものなるを知らざるために外ならざれど、學校にては、女生をして家庭思想に富ましむるやうつとむべし。

蓋、家庭思想を養ふと思ひ誤りて、空想、若くは外つ國風の妄念に流れつゝ、わが國情と衝突するを悟らざらんか、反りて忌むべきわざになん。されど、この思想を養ふには、人の妻となり母となりて、善良なる家庭を作りし經驗あるものを師に撰び、實地の呼吸を以て感化せらるべし。若しわが國風を忘れて、外國の(ホーム)はかゝるものなり、故にわが風俗を全滅せざる以上は、理想行はれずといはむか、將に日本女子を教育する道にあらざれど、おのれの知るところにあらず。唯、日本女子の見識を立てゝ他國の思想を參酌することそ尊き教育家なれ。

先づ家庭には、善美なる家風を作り、女道を實踐すべきものなれど、女生をして祖先を崇め、老者を安んじ、小者を懷くる等人倫を知らしむべし。又女子は、學校を出づ

るや、人の母たるべきものなれど、家庭敎育の任に堪ふる智識なかるべき。されど、家政の學科中に、育兒法を敎ふるのみならず、家庭敎育の思想をも授くべし。

次に、家事經濟の智識を養はしむべし。そは、經濟學の原則に法とるべきは勿論なれど、男子と異りて、積極的の經濟よりも消極的の經濟を主とすべけれど、儉約の道を知ること肝要なり。故に、家計簿記を製し、收納を明にするなど、一家を整理すべし。又料理は、經濟、及び衞生に關係するものなれど、頗る大切なり。蓋、何れの女學校にも、この科はあれど、民人の常食ならざるものを苦みつゝ學び、實地に應する能はざることそ、殆ど通弊なれど、心してよ。

其次は、衞生の思想なり。なべて、女子は、衞生の智識に乏しけれどにや、知らず識らず、家族健康の害あるを顧みず、自らも不養生に甘んずる傾向あれど、この思想を注入すべし。これと同時に、女子は、看病學の大要を知るべし。そは、家族の生死に係關するものなれど、女學校の課程にも加ふべきなり。

なほ、來客に對する作法心得、及び女禮をも敎ふべし。

以上を總括したるものを家政の大略となすなり。されど、これらを精密に敎へんには數多の敎科時間を要すべけれど、既に判別心の發達するのみかは、他の學識にも富め

ど、唯大体につきて注意だに與ふれど可なり。これ傍観者の想像するごとく難からざるべし。



史談

山田りと女の逸傳（續）

井上頼文

おのれも、はじめは、鶴梁文抄なる齋藤拙堂翁の附記に「宮川渡船本收錢、間之山路本甚悪、月仙捐數千金、並除旅人之患、其功於山田大矣、足代寛居爲余言」とあるを見て、間の山の開鑿は、全く月仙法師の功とのみ思ひたりき。ことに間の山とは程ちかき山田なる足代弘訓翁が、安濃津の拙堂翁にかたられたることなれど、ひとしは確實なることとならんと、誰も思ふぞことわりなる。然るに、宇治山田の事蹟にあきらかなる橋村正璟ぬしが、此の誤謬をこまやかに談らるゝによりて、始て其の實を得たり。月仙法師が、繪畫の潤筆料を山田奉行に屬し、數村の凶荒を救ひし功は大なりと雖も、間

の山路を開きたる事實は誤なり。また、宮川渡船本收錢云々月仙數千金を捐て云々とある謬は、山田の老人の皆知る所なり。いかでかゝる誤謬を、足代翁が談らるべき。特に寛居翁は、山田の事蹟にくはしき人なるをや。こは必拙堂翁が暗記のあやまちなり。もとより、宮川渡船の金は、月仙法師の出金にはあらず、宇治山田兩會合所より、宮川錢とて、各戸軒別に錢を徴集し、參宮人を無錢にて渡したるなり。此の頃は、宇治六坊山田三方の大年寄等各組下の者を率ゐて、宮川渡船場なる番所に出張して、出入の船を吟味したり。こは、船人等が、强て大勢の者を乘らしめ、又は出水の時、參宮人の强て渡らんことを船人に迫ることなどあれど、それらの危險を防ぐ爲なり。(宇治六坊とは、法樂舍、成願寺、清水寺、地藏院、大日坊、文珠院の六坊あるに依りて、此の地を支配する年寄頭を、宇治六坊の大年寄といへり。山田三方とは、岩淵坊、須原方、坂方をいひ、事あるごとに、宇治六坊、山田三方の年寄あつまりて議したりしかど、かく名づけたりとぞ)また諸侯の參宮、或は多くの人の渡る時、或は大水の際などは、船の數を增し、または船橋を組むなど、臨機のはからひをなす。これ皆兩會合の扱ふことにして、其の費用徴集の觸書等も、今に猶殘りて、全く山田奉行の保管したる月仙金とは、關係なきものなり。また間の山路本甚惡、月仙捐數千金云々とあ

れど、もと間の山の道路を開きたるは、藤波氏富卿に始まり、千束屋りと女にいたりて其の功を畢へたるなり。いまだ月仙法師の大工事を起して、相の山を開きたることを聞かず、よし開きたりと謂ふ說ありとも、そは修繕を加へしことの誤傳なりといはれぬ。思へど、此の誤傳のもとは、さきにあげたる鶴梁文鈔なる拙堂翁が附記の粗漏によりて始りしことなりけり。筆のつか執る世の博士たちよ、もの書くごとによく正しあきらめて、卒爾なる事を記されざらんやうの心がまへこそあらまほしけれ。そもそも間の山は、延寳二年八月、藤波內宮一の禰宜、從二位氏富神主の發意にて、道路をつくろひたるが始めなり。そは、河崎延貞の蟄居紀談に、『牛谷坂を平すといふ條に、宇治より長峯に趣く坂を牛谷といふ。最も嶮しくして、石出で、水流れ、往來心よからず。一老嫗は、杖を曳きて坂を登るとて「往來しげき參宮人、いかばかりの辛苦にはあるらん、せめて尾部坂の樣にもありなど」と、一人言ぞいひける折節、一禰宜氏富神主外宮に參るとて、肩輿の內にて、是を聞きて、實たる事なりとて、數百金の費を負ひて、延寳二年八月に、多くの人夫を驅けて、其の嶮しきを引き平して、左右の壁立を切開かせけるに、蟻の如くにはれる人夫の上へ、壁立のごとくするとの土石一丈塊頹落して、土に埋れて息絕ね、石に擊れて骨摧け、同時に七人死にたり。傷つ

くだかりにして死せざるもの多し。如此人夫の死し、又は傷つくの慘みありけれども、牛谷の坂、參宮人往來の難澁なくなりしは、永世無窮の大功と云べし」と見ねたるを以て知るべし。如此氏富神主は、數百金のたからをなげうちて工事を起し、人夫あまたそこなはるゝまでに力を入れられしかど、未充分の功を奏せざりき。その後工事をつぎて、往來の便をあたへんとする義俠心の人もあらざりけらし。りと女はかよはき女の身もて、丈夫も企て及びぬ大工事を興し、資財をかたむけて、萬人のなやみを救ひしは、實に世に稀なる功績といひつべし。かゝる大なる功績の、かくれて世に知られざらんことのなげかはしく、はた、間の阪路ふみならす數萬の人をして、りと女の志の厚かりしことを知らしめむとて、こちたきまで事實を辨明する事とはなしぬ。

大宰春臺の母

壚井福子

鶯もひなよりのまねびによりて其の聲を異にす。家庭の教育の忽にすべからざること今更に説くまでもなし。折たく柴の記をよみけん人は、卓絶偉大の白石を作りしは、父なる人が朝夕の教訓によるもの多きを知りぬべし。また、常山紀談をよみ、その博學多識なる湯淺常山を知る人は、また、その母なる人が心付の程を思ひ知りぬべし。此

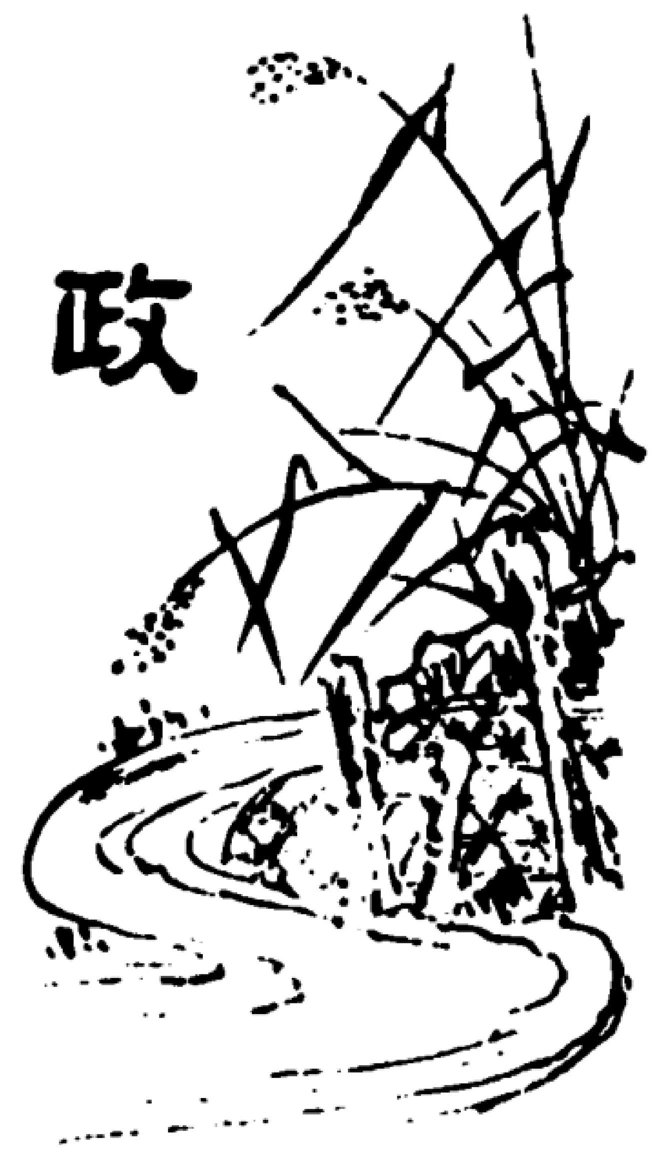
處にまた、徂徠門下の高足、享保の鴻儒と稱せられたる大宰春臺がむかしを聞くに、これ、また、其の母なる人が家庭の感化の功によれる事いと多し。其の母と云ふは清水氏にて、名は何と呼びけん世につたはらず。其の子、春臺とは、その號にて、名は純、字を德夫、また號を紫園と云ひ、通稱を彌左衛門と呼べり。信州飯田の人、本姓は平手にて、加賀侯の大夫横山氏に仕へしが、父言親、そのゆかりなる太宰謙翁の嗣となりしを以て、其の姓を冐しゝなり。春臺の人となりを聞くに、誠に敏捷にして心正しく、いやしくも曲りし事あれど、如何なる高貴の人たりとも、つゆ憚る方なく、直言を以て正さずと云ふことなかりき。或時、其の友に招れて東都に至り、物徂徠が門に遊び、經術を究めぬ。春臺、日來、子路を以てみづからゆるして曰く、寧ろ罪をその黨に得るとも惡言耳に入るゝに忍びずとて、直言避くる事なく、剛毅、狷介を以て自ら居りぬ。されど、春臺に學べる人々、皆畏敬して、將軍の前に於けるがごとくなりきと云ふ。諸侯大夫より招かれし事いと多かりしかど、春臺未だ嘗て巳をまげて仕進を求めず、進退たゞ禮を以てせり。かつて、老中岩村侯の世子、春臺を師とたのまんその招きに應じて初めて至りけるに、其の世子の送迎せざるを見、怫然として怒りて曰く、巳は元より卑賤の處士なれど、如何で貴人に傲らん、されど、我がごとく所のも

のは聖人の道なり、されど苟も道を開かんと欲するものは、人には禮せずとも、聖人に對しては、君主と雖も禮あるべきを、世子は我を見る事うすきと共に、道を尊ぶ事もうすし、道を奉ずるうすき者には、我また仕へて聖人をけがすに忍びずとて、師たるを辭みしに、世子大にさとりて、のち改めつゝしみて迎へたりしとなり。春臺、のち六經畧說をあらはして之を世子に進めたりしと云ふ。行はさておき、春臺、誠に博學宏識、天文、律暦、算數を始めとして、字學、音韻、書法、浮屠、巫說、醫方、雜駁の說に至るまでも通せざるなく、そが中にも、尤心を經濟の學に留め、文を屬すれど千言たちどころになる、筆翰流るゝが如し。しかして勉强、また夜を日につきてうむことなかりき。其の書を讀むや、精詳、緻密、一字、一句いやしくもかりそめにせず、點書訛あれど必ず改めて止む。その史漢の如きは、句讀、圈點、及び標書、各五色を以て分ち施せしさま、さながら爛然として繡の如かりしとなり。さばかりにつとめたりしかど、著はす所の書いと多く、かの秦の世に亡びて、久しく支那にたえたる漢孔子傳、古文孝經など、春臺は諸博士の傳ふ所を校訂し、音註を作りて刊行したりしに、清の鮑廷、之を見て大に悅び、之を知不足齋叢書第一集に収めしとぞ。其の他、經濟錄、論語古訓など、著書三十五の多きに至りて、後の學ぶものをして大にたより

を得せしめしは、そも、春臺、その人の非凡なりしとは云へ、また母氏が教訓の力のあづかる所少からず。さるは、春臺のいと、いとけなくして、まだ、にこ草、しこ草の分ちもさだかならざりし時、其の父なる柏樹齋の翁は、頗る書をよむ事を好みしかども、其の家もと武士なれど、たゞ其の子の性によりて教へよとのみにて、德に入るの道、強ひても聞かせざりしを、母なる人は、つとめて之を教へ、たとへ、武士の子にして、武はもとより捨てられずとも、文もまたあらずば、いたづらに醜の大丈夫となるのみにて、やんごとなき智將となるを得ず、性は習によりてかはるものなり、汝、文武の良將とならまほしくば、二つながらつとめよやとて、朝には源平盛衰記を教へて、盛衰の理をとき、怠るべからずとさとし。夕には保元物語、平治物語、太平記等をよましめ、忠臣孝子がむかしをとき、毎夜必ず十枚をよましめ、己も燭火のかげ、きく手やすめず、裁縫の業をとりて、もし、春臺、怠慢の色の見ゆる事あるときは、己が形をきつと改め正し、燭火をかきたてゝ、針もつ手を叱するに、春臺も心さまされて、机を叩きて讀む事かたの如く、終るや、母もまた少しくはこぶ手をゆるませ、汝今よみつる大將、勇士の如く、名を竹帛に垂れんと欲せば、また、それ、必ずつとめて、文武の道に志を専にすべしと、儀式くづさずとき聞すれば、春臺も亦かしこみて教を奉

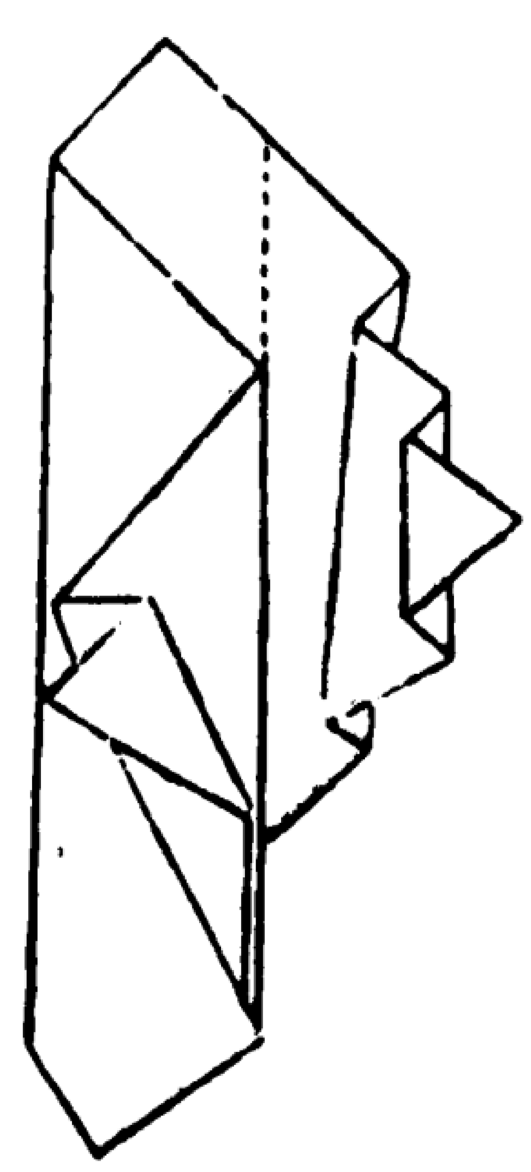
じ、禮して臥戸に入れり。母氏は、なほ殘りて其の子が夢を占ひて、いとよろこびて、また枕につきぬ。春臺が勤勉なりしも、いはけなきよりのならはしによれり。そのならはしは、母の教育にもよれり。家庭の教育もまた忽ならずやは。

家政



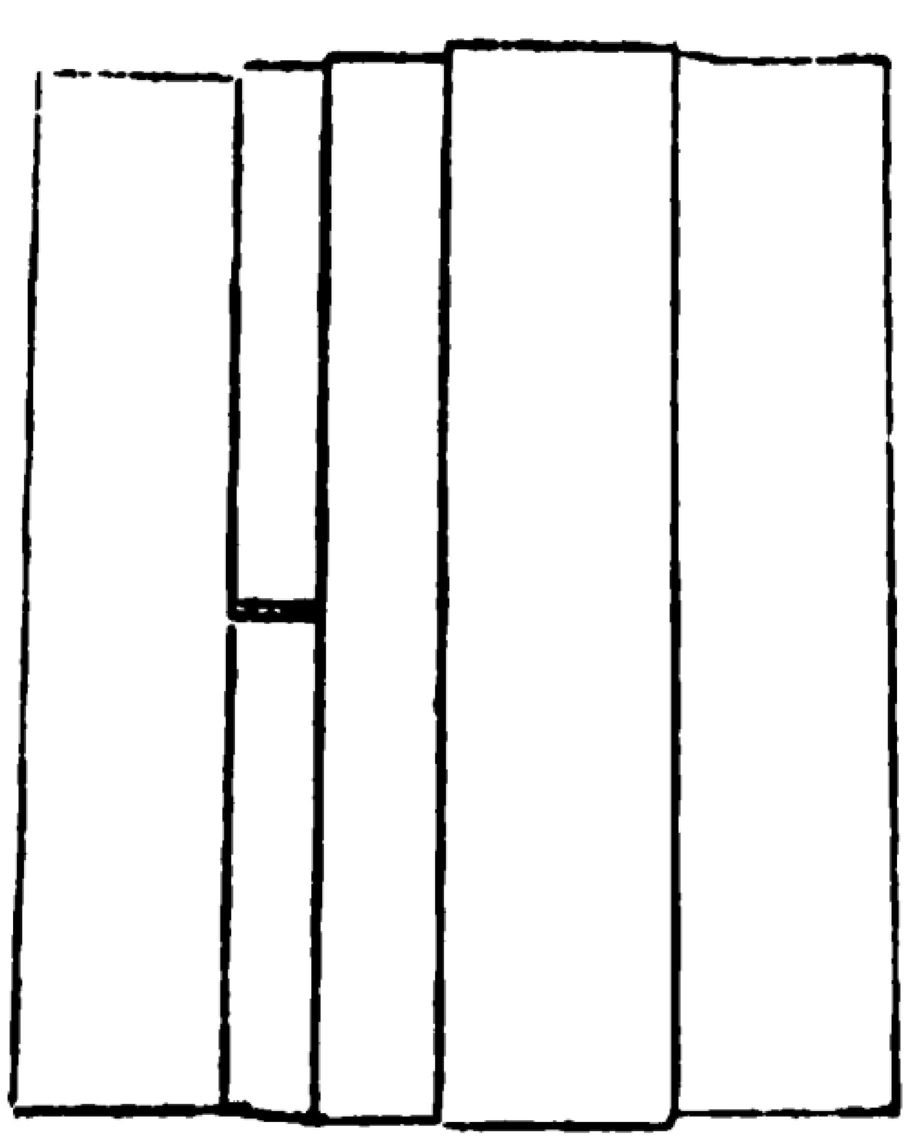
折形

有住齊

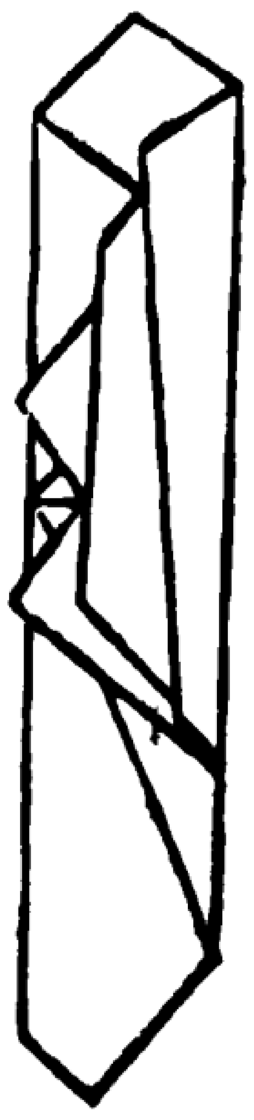


全く解きたる圖

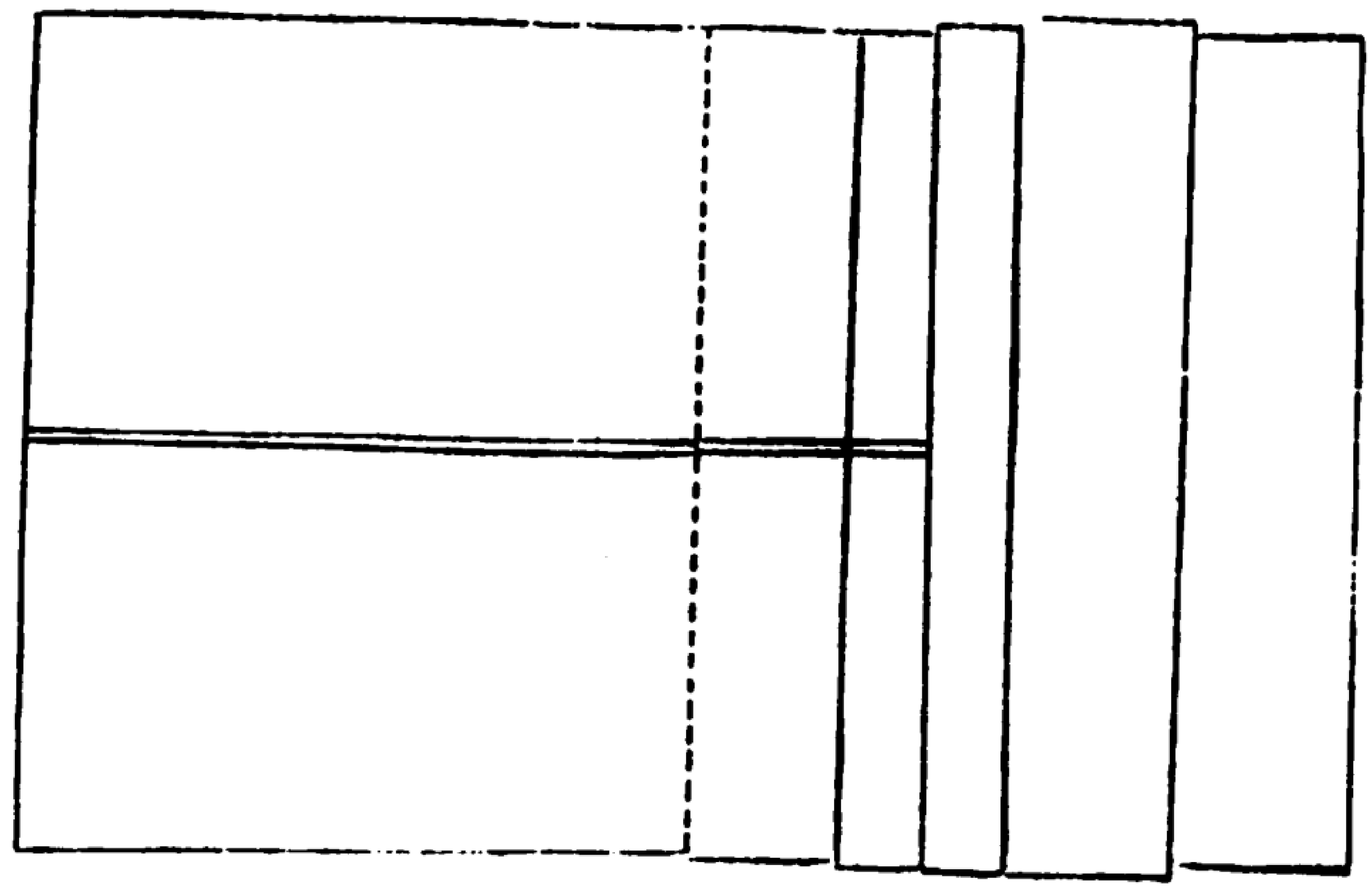
卷物包　紗綾、縮緬などを包むなり。水引かけ、書付をする



縫帶包

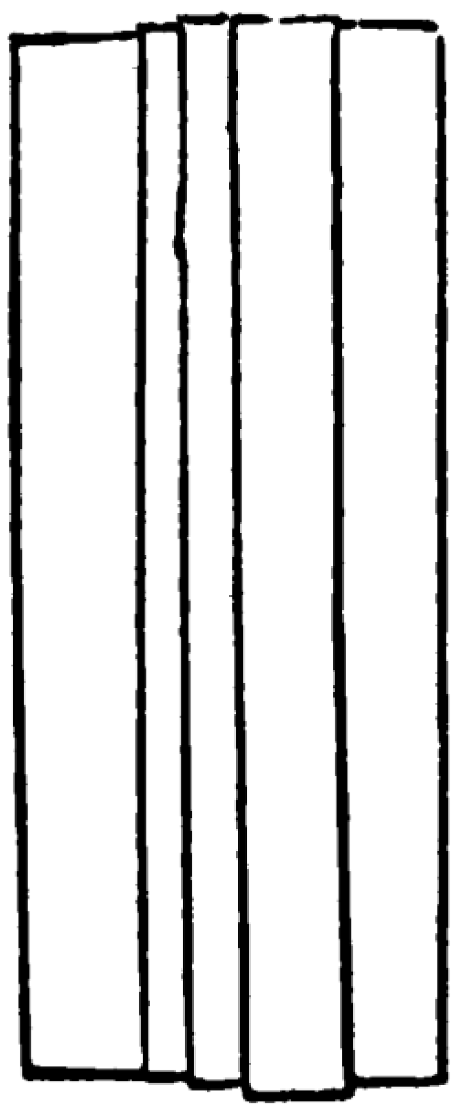


全じく左を開きたる處。中眞の双線は紙の兩方を折りて、中眞に折り合せたる所なり。

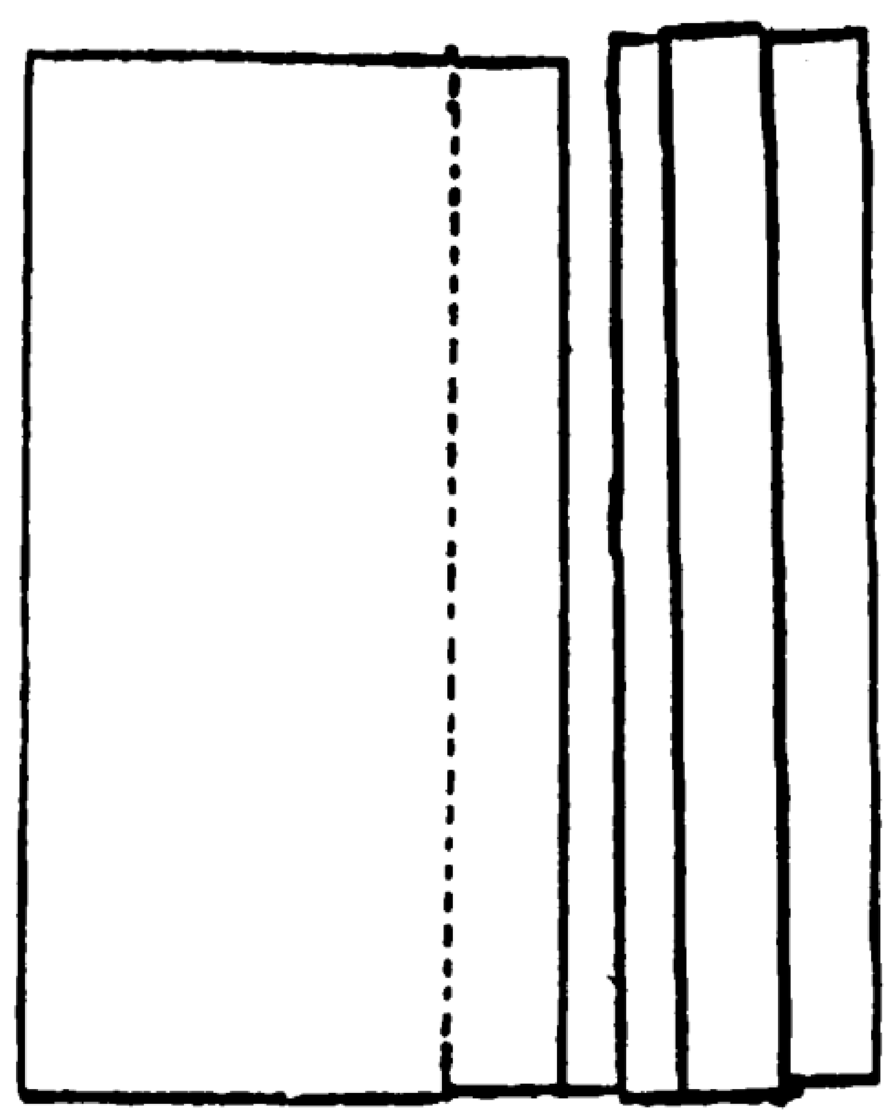


巻衣巻素襖包

形の有るをを形さかひ改心にて巻返包、水引書附あり。



全じく左をひらきたる處。



女の禮（續）

禮節教授　有住常子

禮とは、たふとき人は賤しきをあなどらず、賤しき人は貴きを敬まふをいひ、節とは、たふときと、賤しきと、その位の程々につきて、過たる事もなく、及ざる事もなく、我身の位、相應に振舞ことをいふなり。上とは上輩なり、我より位上なる人をいひ。

中と云は等輩なり、われと同じ位なるを云ひ。下と云は下輩なり、我より下なる人をいふなり。又上輩にも、上、中、下あり。等輩にも、上、中、下あり下輩にも、上、中、下あり。如此の品々を、能わきまへて、ゐやをなすべきなり。

うやまふ人に、公儀と、私の差別あり。主君を初め奉り、主君の御兄弟、御親類、其外、主君のうやまひたまふ人をは、臣としては、殊更うやまふべきなり。是公儀の敬なり。又わが父母は勿論、伯父、伯母、叔父、叔母、兄、姉、師匠、貴僧、智識、の類を敬ふは私のうやまひ也。公儀、又他人の前にて、私のうやまひをなすべからず。師匠などは、他人の前なりとも、その人に同じ弟子同志にあらで敬ふべし。貴僧、智識なども、他人の前なりとも、同じ心に信仰する人々の中にては敬ふべし。公儀なりとも主君も信仰し給はゞ、なほ以て敬ふべき事勿論なり又若輩にして、老人をも、等輩なりとも敬ふべきなり。是も私のうやまひなり。公儀にては、其位相應にあつかふべきなり。

敬ふ人の前にては、いかにも我身をへりくだるべき事なれども、あまりに式退の過ざるは、かへりて狼籍にて、おこつき方に見ゆるなり。たとへば、貴人の、こなたへと請じたまふ時に、三度迄は辭退して下座に有べし、三度にあまらば、ともかくも仰に隨ふべし、古より、色躰は三度に過すべからずと申候也。一兩度にて仰に隨ふは禮の節にはづれたるなり四度にても、なほ仰に隨はざるは禮の節にはづれたる也。

色躰は、じきあひの事なり。式退と云ふ事本義なり。式躰とも書なり。式退は猶本義なり。是を用

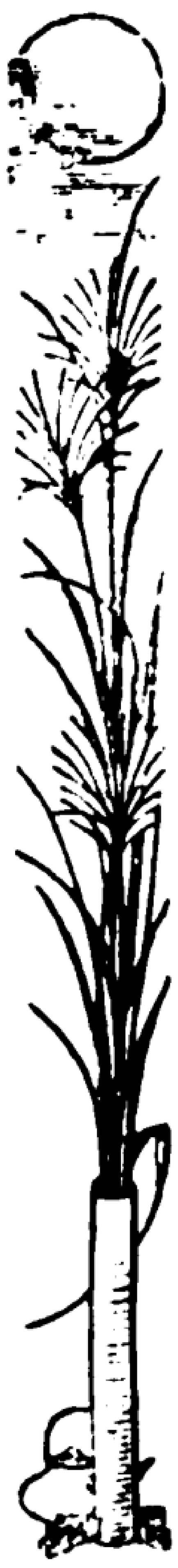
べし。れこつき方とは、たわけめきたると云ふ事なり。節にはづれたるとはほどらひにはつるゝなり。

時宜に隨ふと云ふは、貴人には如斯、下輩には如此と、法の定りたる事も、時により、處によりて法の如くならぬ事あるものなり。夫を無理に法の如くなさんとする時は、却て無禮に成なり。左樣の時は、法にはづるゝとも、時の仕合の能樣にするを時宜に隨ふとは云ふなり。いか樣の時、如此するといふ事と、前方には定置がたし。たとへば、弓を貴人へ參らする時に、弓は左の御手に持たまふものなれば、左の御手に渡し申事法なり。貴人もし右の御手を出されたるに、法にあらずとて、右の御手に渡し申さず、左の御手を出さるゝを待申樣あるは、時宜にはづれたるなり。左樣の時は、法にかゝはらず、右の御手にわたし申候を、時宜に隨ふ事と云ふ也時宜に隨ふと云ふ事、わろく心得候へば、無法になり候間、能々わきまふべき事なり。

座敷往來の事、めしつかはれ候時も、又常々座敷にも、靜に可有事に候、小足にあゆみ候へば、身よりよく候、大足にあゆみ候事、驚き足とて古へより笑候事にて候、足音高きは尾籠なり。敷居越候にも、貴人の方の足を、まづ座敷の内にふみ入べからず。又貴人の御前を通候時は、いつも必蹲居すべし、又座敷を歩むに、手をふりてありき候事見苦しきなり。兩の手の內を少しくばめ候樣にして、兩手を帶の下のあたりに、前の通りに、なにもなく、目にたゝぬ樣に、そと置てありくべし。ゆびを廣げて強くれしつけなどしては見ぐるしきものなり。又そりかへりありき候は尾籠なり。あまり

うつむきすぎたるも見苦し、足元より二間斗先を下目に見てありくべし、左右を見る事は有まじきなり(座居さハ兩膝をつきつまたてゐまゝ兩手をつく事に候今坐中さも申し候(編者注))とふるくより傳へはべるなり。

いまこれよりつぎ〳〵かいつけむと思ひたち侍るはこれらいひつたへたるごとぐさをむねとして、いとふるき世の御手振と、申すもかしこき新らしき今の大御代とにわたりて、女ぎみたちの、あしたゆふべに心得たらねを、くちをしからむと思はるゝふしをおろかなる身にすこしつたへうけたるをなむ。

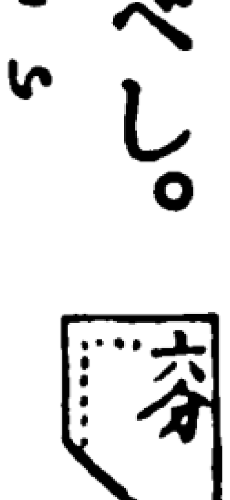


たちぬひ

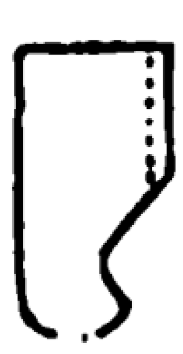
西山たい子

(七七)足袋のぬひ方

まづ内甲の切の裏表をとりて、切の表を中にして、裏表よく重ね合せ、口と、踵の縦とをぬふべし。たゞし踵の下の方を六分ばかり明けおくべし。



即ち……のひきある處をぬふなり。左右ともさやうに縫ひてよくすぢをつけて引きかへすべし。それより外甲の切れをとりて、裏表前の如くに合せて



口、即ち……の處だけをぬひ、前に縫ひたる内甲の切をかぶせ、外甲の表裏の切にて挾みて指の股より甲の縦とをぬひ、また踵の下を六分ばかりぬふべし。即ち



……の處をぬふなり。左右う

ともにさやうにぬひ終らば、牙鐖を付るべき襠の切れをとりて、之もまた前の如くに裏表を合せて、その外甲の明に合せて長さを定め、圖の如くぬひて、ぬひこみを切り去り、引きかへして、外甲の明にはさみてぬひ、引きかへすべし。それより、指の股に丸き切を絎けつけ、さて、指先の處を、丸袖をくゝる如きやうに、それよりは小針にぬひて、臂積をとり、さて、それより底の切を二枚なり、三枚なり合せて、甲のぬひたるものにぬひ合するなり。その縫ひ合するには、まづ、指の股と、踵とを、最初に、絲にてくゝりれき、二本糸によりて指の股よりれや指の方へ、ひとはりぬきにして踵までぬひつけ、終りなば、また元にかへして指の股までぬひ、それより四の指を入るゝ方へ、また一はりぬきにして踵までぬひ行かば、また引きかへして股までぬひ、よくとめて、糸を切り、ひきかへし、牙鐖をつけ、牙鐖かけを内甲につけるなり。左右よく同じものをぬふものなれば、よく心を用ゐて裁縫すべし。

その圖



造花

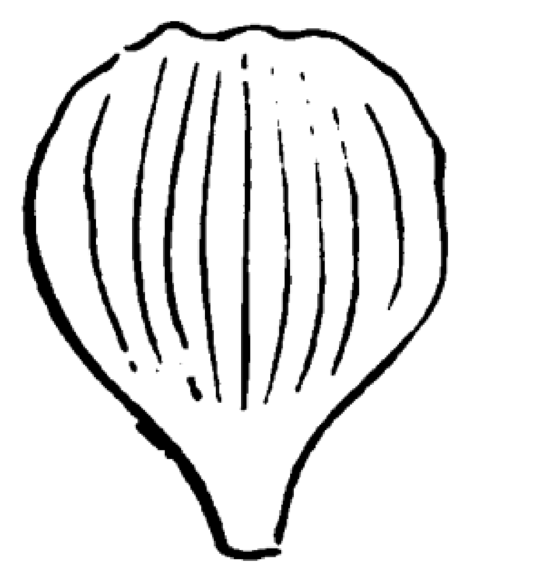
共立女子職業學校教授　伏見藤三郎

石榴

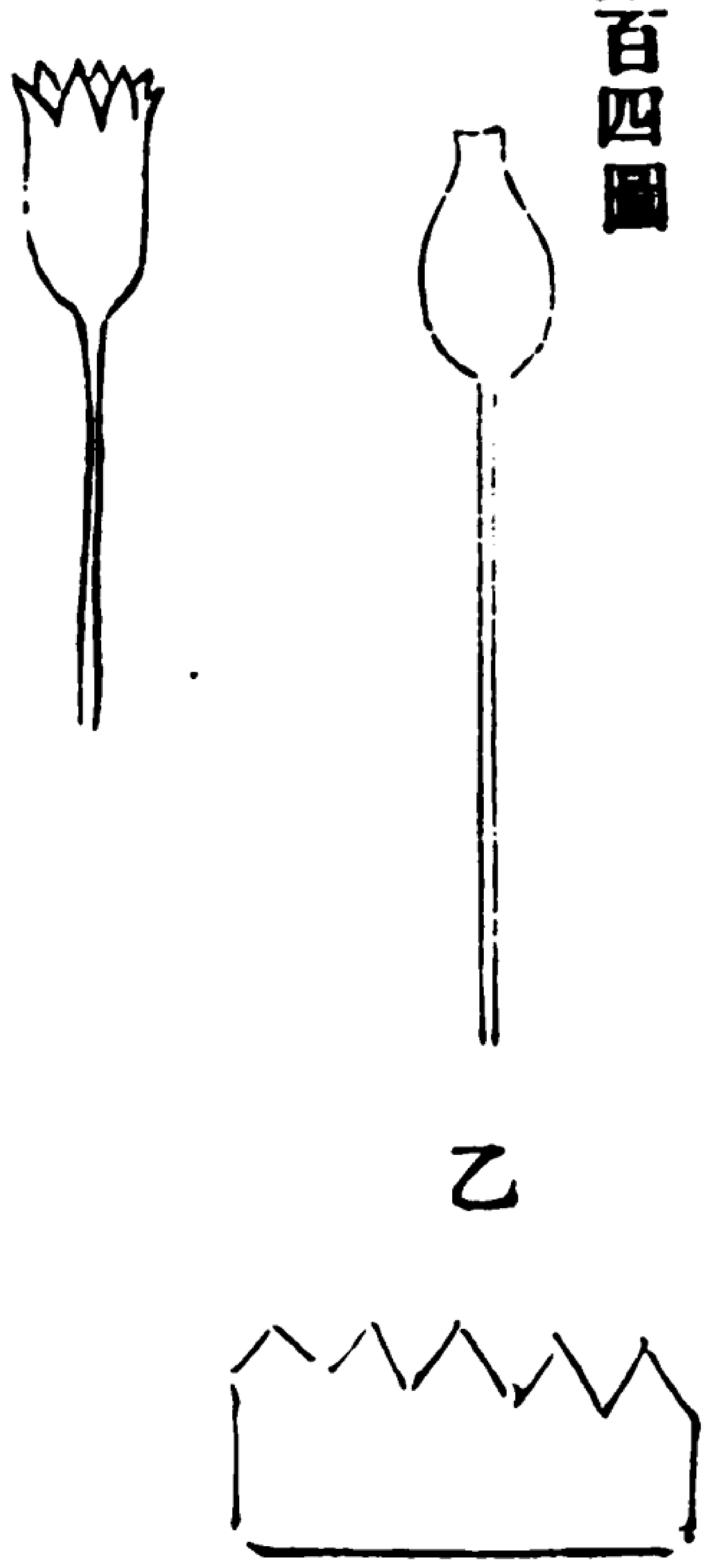
滿開花、花瓣には、紕、羽二重、寒冷紗を適宜に撰び、絹ものは裏より薄糊を引き、染め方は、初め「オ

レンヂ」（黄）にて下染し、乾して后「スカレット」にて染め上げ、之を第百三圖の如き形に斷ち、筋鏝にて圖に示す如く、裏より少し縮らすべし。蕚は、第百四圖の甲の如き形に、針金の先に綿をつけ、此の

第百三圖



第百四圖



先端に、書學用紙の厚さものを、乙圖の形に斷ちて圓く卷きつけ、糊にて止め、丙の如くす。倘此の上に少しく綿を卷き、濃き糊を引きて光澤を出し、之を花瓣と仝じ色に染むべし。蘂は、細かきかたん糸四五十本を、前の花瓣と仝じ繪の具を極く薄く溶き、之に薄糊を混じたるものにて染め、乾して后、其の一方を絞り長さを、花瓣にかくるゝ位に見計ひて斷ち、その端に糊をつけて罌粟を着け、之を蕚の中にさしこむべし。蕚に花瓣を着くるには、適宜に見計ひて、恰好よく造るべし。花によりて、或は六枚、或は七枚、八枚等一定せず。

蕾の造り方は、第百五圖の如き形に、針金の先に綿を卷きつけ、甲は雄花の蕚にして、乙は雌花の蕚なり。滿開花を造るもの此の心得あるべし糊を幾度も

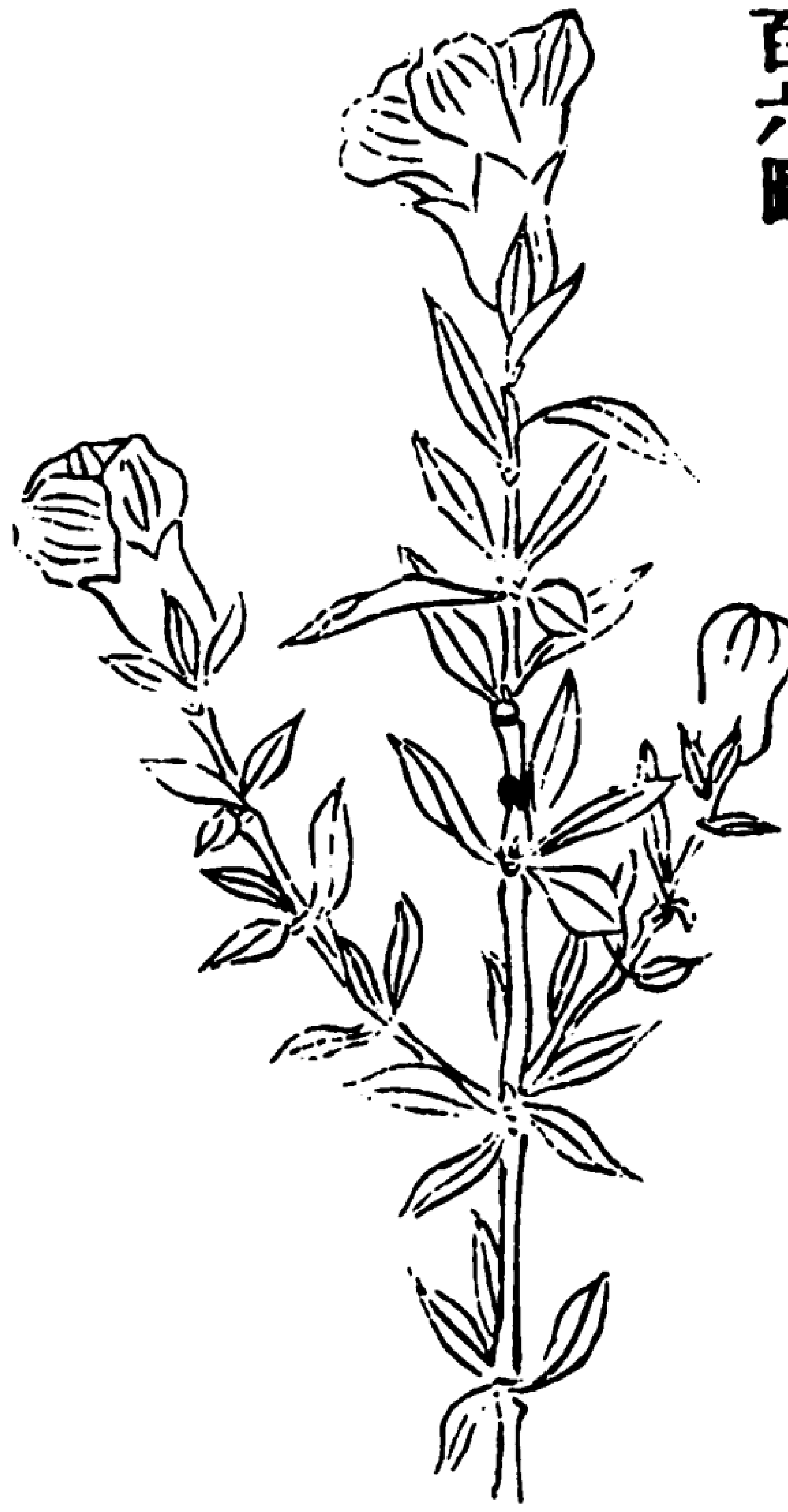
第百五圖



能く着けて光澤を出して固め、色は花瓣と仝じに染め、圖に示せる如く、先端に、鏝にて少し筋を着くべし。

葉の造り方　葉は、寒冷紗を普通の葉の色に染め、實物に合して形を取り、筋鏝にて筋をつけ、蠟を引きて光澤を着くべし。

以上造りしものをあつめ、好きくばりに纏め造るべし。莖を巻くには、薄美濃紙を「カシトラバル」にて染めたるものを用ゆべし。



第百六圖

だいどころ

「パイ」及び「タート」製法

是れは、一種の饅頭やうの食物なり。「パイ」に、肉製と果製の二種あり。其形小にしてひらたき物を「タート」と云。此二品は、皆捏粉にて製するなり、先づ之を製するには、粉を捏るに、其場所の涼しき所を擇むべし。是れは、其捏粉の温き空氣にふれぬやうするが爲なり。叉手を清潔にし、粉を延す板、麵棒も、平滑にして能く乾燥すべし、捏粉に和する牛酪は新らしく良き品を擇むべし、叉之れに代ゆるに、精製の豚の脂肪を用ふるも可なれども、其最も良きものは牛酪と豚の脂肪とを等分に混合せたるも

のとす、粉のこね方は、果製の方を、肉製よりも一層濃くなすべし。

「パイ」を燒くには、火力に最も、注意すべし。其火力適度を得ざれば、兎角燒き損ふこと多ければなり故に、捏粉を竈に入れる時に、其內の、熱度を試み能程に煖まりたる頃、捏粉を小くちぎりて其中に投れたる時、熱度に觸れて小片能く膨脹れ上れば其熱度の宜しきを得たるなり。かくして火力を試みたる後、捏粉を竈の棚に列載せ、其戶を閉ぢ、四五分時間は戶を開くべからず、其後、戶を開くこともあるも「パイ」の竈の內にある間は、可成、徐かに開閉し、外部の冷氣を竈の中に入らぬやうにすべし。若冷氣多分に入る時は、一旦膨脹れたる「パイ」は、其氣にふれて萎縮すればなり。但し燒く時間は、混和物によりて長短あり。

「パイ」燒けたる時、之れを竈より出せば、其熱の冷えざる中、其表皮に、鷄卵の蛋白と水とを等分に交ぜ合せたるもの、又は濃き砂糖水を刷毛にて塗り光澤を附けべし、但し「タート」は、之れを塗らず、用ふる前に白砂糖をふりかけるも宜し、若冷えたる「タート」を用ふる時は、之れを煖め砂糖をかけて出すべし。



秀歌集（七）

塩井正男

○

いもか見しあふちの花は散りぬべし

わが泣く涙いまだひなくに

○これは、萬葉集の五の卷に見えて、山上憶良がその妻のみまかりれるをかなしみてよめる歌なり○山上憶良のことは、史傳詳かならねど、文武天皇の大寶元年に、粟田朝臣眞人が遣唐使と成りて彼の國に赴ける時、憶良は少錄に選まれて、共に唐へ渡りしことあり。それより或は伯耆守と成り或は筑前守と成り、天平五年に七十四歳にて歿したる人なり。妻のみまかりしは、筑前の國守たりし時にて、その妻女は、はじめ奈良の都にとゞまりてありけるが、憶良を慕うて、はる〲筑前まで尋ね來りて、間もなく其の地にてみまかりしなり○いも。女子を親みてよぶ詞にて、こゝにては、妻女のことなり。○あふちの花。今の俗せんだんといふ樹にて、葉は南天に似て鋸齒の如き刻あり、夏の頃、うす紫色の小やかなる花を開くものなり○散りぬべし。散るであらうと推量したる詞なり○いまだひなくに。未が乾かぬにといふことなり。○一首の意は、妻が存命中に見たるあふちの花は最早散るであらう、妻をいたみてわが泣く涙はいまだ乾かぬにといふことにて、亡き妻のことを思ふあまりに、故鄕なる家のあふちの花をさへ思ひ出でて、妻が見馴れたるあふちの花も最早散ならむ。わが涙はまだ乾かないと思ひながめたるにてもとより、意匠はさしたることはあらねど、切なる心情のこぼれ出でて、何となうあはれに身にしみてればゆる歌なり

○

忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや
雪ふみわけて君を見むとは

○これは、古今集の十八の巻にありて、在原の業平朝臣の歌なり○伊勢物語にもある如く、此の歌はもと業平が常にまゐり仕へたる惟高親王と申し奉るが、いつしか世を思ひ捨てさせられ、おんかざりをおろされて、小野といふ所に閑居したまひけるを、その後、正月ばかりに、業平が、その閑居を訪ひ奉れるに、比叡の山の麓なれば、雪いと深くつもれるを、ふみわけ／＼て、やうやくにその御室に詣でつきて、拝み奉るにいとゞもの淋しきおん住居の有様に、いとゞもの悲しくおぼえて、久しくおん物語りなどして、さて夕暮に別れ奉らむとて、泣く／＼よみ出でたるものなりといふ。惟高親王は、文德天皇の第一の皇子におはします、○在原業平は、阿保親王の第五子にて、在原行平の弟なり。才學に長じ文事に達し、歌には、有名なる六歌仙の一人に數へられたるほどにて、誠に切情のこぼれて誦すべく愛すべき歌多し。○忘れては。現のことなるを、やゝもすれば忘れてはといふことなり。○思ひきや。思ひがけきや思ひがけざりしといふ意なり。○君。惟高親王をさしたてまつりしなり。○一首の意は、あなた様に斯く御目にかゝるは誠に現のことなるを、ともすれば、その現なることを忘れては、夢では無いかと思はれて、現のことは覺えず。誠にかゝる深雪をふみわけ來て、かゝるものさびしき御住居に、あなた様と見奉らむとは、思ひがけきや露ばかりも思ひがけざりし事をと、いふことにて、さばかりものさびしき山里に思ひ入りたまへる親王の御身の御いたはしさに、をしみなきたるなり。君を思ふ心情の溢れ出でて、誠にあはれとも、やさしとも、いは

ん方なく、身にしみておぼゆる歌にして、また、業平朝臣が氣慨の士たりしことを見るべき歌なり。

○

世の中にさらぬ別れの無くもがな

千代もとなげく人の子のため

○これも業平朝臣の歌にて、古今集の十七の卷に見ゆ。業平朝臣の母のみこ、長岡といふ所に住みておはしたるが、朝臣は、都の宮仕への事しげきにまぎれて、久しく、えも問はでありけれど、しはすばかりに、母のみこのもとより、

老いぬれどさらぬ別れのありといへど

いよ〳〵見まくほしき君かな

と御歌ありければ、その時、朝臣が母のみこの御歌に答へてかへしたまへるが、此の「世の中に」の歌なり。

伊勢物語には、朝臣此の時母のみこよりの御歌をよまるゝや、馬にものりあへず、參るとて、いといたう打ち泣きて、道すがら思ひける御歌なりとあり。業平朝臣の母のみことは、桓武天皇の皇女におはして、伊登内親王と申し奉りし御方なり長岡といふ所は、山城の乙訓郡にあり。

○此の母のみこの御歌の意は、いたく年の老いぬれど、のがれ難き死別といふものがあるといふからして、こたびの病氣は、そののがれ難き別れとも成らむと思はるる故に、常にも見まほしき御前を、いよ〳〵見まほしくおぼゆるワイといふことにて、

御病氣にかゝらせられて、最愛の朝臣を、一目御覽せられたくおぼす御心を申しやりたまへるにて御子をおぼしめす御心情見えて、誠にかなしき御

歌と申すべし。
○さらぬ別れ。のがれがたき別れといふことにて即ち、死別をいへるなり。○なくもかな無くてあれかしと希望せる詞なり。○千代もとなげく、伊勢物語には「千代もといのる」とあり。此のなげくは愁嘆の意にあらずして、深く心に願ふといふ如き意に見るべし。されど、千代もれはせど深く心に願ふといふ意なり。○人の子の爲め。人の子の爲めにといふことにて、人の子とは、朝臣自身を、斯くいはれたるなり。○一首の意は、千代もれはせと、深く心に母の長壽を願ふ子たる此の我が身の爲めに、のがれがたき死別などは、世の中に無くてあれかしといふことにて、深く母のれん上をればしめす朝臣の孝情こぼれ出で丶、誠にやさしくかなしく情ふかき歌といふべし。

○

から衣きつ丶なれにし妻しあれば
　はる〴〵來ぬる旅をしぞ思ふ

○これも、業平朝臣の歌にて、古今集の九の巻に見ゆ、伊勢物語にもある如く、朝臣が、友とする者一人二人誘いて、東の方へ行きける時、三河の國八橋といふ所にて其の澤邊に杜若のいと面白く咲きたるを見て、かきつばたといふ五文字を、句の上におきて、旅の心をよまむとてよみたまへる歌なり。
○から衣きつ丶。衣は着れど、身に訓る丶もの故に、「から衣着つ丶馴れにし」といひかけて、「馴れにし妻といふ詞の序としたまへるにて、此の「から衣きつ丶」といふ詞は、一首の意には、何の關

係も無きなり。から衣とは、支那風にならひてのくれる衣なり。○妻しあれど。妻ある故にといふ意にて、「妻し」の「し」は、語勢を强めん爲めに置ける詞にて、殊なる意は無し。○旅をしぞ思ふ。旅を悲しく思ふといふことにて、「旅をしぞ」の「し」も、「妻し」の「し」と全じ。

○一首の意は、都に馴れたる妻がある故に、遙に遠く來たりたる此の旅が、悲しく思はるゝよといふことにて、これも、情ふかくこもりて、やさしくかなしき歌なり。

ふゝくろ　第二稿

本年三月の頃なりけむ、ふゝくろと題して、縣居翁の歌論を讀者に紹介せむ事を約したりき。其の第一稿は、載せて女鑑第百廿九號學園欄内にあり。爾來寄稿者の境遇に異狀を生して、東奔西走筆を執るに遑なく、思はずもこゝに七閱月の久しきを經たり。今此の東京に寄寓して、頃日漸閑を得たれど、又續稿の筆をとる事としたり。懈怠の罪さる所なし、聊こゝに之を謝す。

原文縣居翁の作　短評　下田義天類

第三

稍はた寒き風たち行けど、御方がたたひらかにれはするよしを承り悅ひぬ。れのれいたはり、此の空と共に、大概さわやき行きぬるを、御こゝろ易かり給はせよ。（此の續から少しいぶかし。誤寫などあるにや。）さるは、御歌みせ給へる、つぶさに直しなどして、まゐるなり。（このまゐるも參らすとあらむかた穩當なるべし。）なほ、次の御歌見せ給へ。同じくは、先かの、一字題百首をのみ、讀みはて給へ。

二字三字の題にては、物むづかしく言はではかなひ侍らぞね、歌のすがた、わたび行くものなり。手習の間は、よろづ務と覺して詠み給へ。さなくては、兎角に、雲上なる心出來ぬものなり。

（脩業の功積り積りて始めて興味を生ず。興味を知りて後の作、之をわがものといふべし。我ものとなりて后、工風のきはまりたる境、即雲上高遠の心を生ず。近世の歌人、多くは、わがものとなるにいたらで、やむものあり。いまだ、興味の生ずるまで、修業せざるによる。故に翁はこれをつとめとせよとのたまへり。能因法師が、すきたまへの五字を、詠歌修業の極意としたるも、この意なるべし。）

たとへぞ、御方々の中にても、上ろうは、れだやかに、立居もうるはしく、唯もだし居給へるさまの飽かぬけしきするをこそ、よしとは見れ。こゝかしこ働きがましく、立ちそうどきたる、一わたり興あるに似て、終にはあきたきわざ也。花なども色のこぢたく、さまぐ〵とめづらしく咲き出でたるは、一日などはめづれど、櫻の千歳に見れど飽かず、秋の野の花の何ぞかりの事どもなきが、あはれなるなどの如く、歌はたゞ心高く、姿うるはしきにあるなり。さきにも、申しゝを、筆の行く儘にまかせて、繰言するなり。

（以上の教もまた、櫻の千歳に見れど飽かず、秋の野の花の何ぞがりの事ともなきが、あはれなる如くに、事もなきやうなれど。萬古不易の明訓なるべし。いく度くりことし給へりとも、こゝかしこ働きかましく、立ちそうどきたる歌論を聞かむよりは、身に染みて覺ゆべし。これ四條大納言の新撰

髓腦に
凡歌は、心高く、すがた、清げにて、をかしき所あるを、すぐれたりと云ふべし。事多く添へくさりて、よみたるはわろきなり。一筋に姿すくよかなるべし。

と云ひ置きたると同一轍なるべし。名人の見る所は、古今かはらぬもの也けり。）

和字正鑑抄の事こゝにて云ひ附け侍り。されど、此の程下りたるなし。近く來べし。此の度は、辨の君は見せ給はず、能く傳へ給はらむかし。

第四

伊勢物語、とり寄せ侍るを、こゝにて一渡見て、後に參らすべし。かさねての便に、長文匣にても、手筐にても、本の入り候ふべきものを給へ。又外の歌とて、御たのみ候まゝ、筆加へ侍り。されど、契もなきには、必せねてとなり。重ねては、やめ給へ（師弟の契約を結びて、後に非ざれど、道の授受をみだりにせざる事、これ、其の道を重みすれどなり。徒に、口傳秘密を唱へて、其のわざを惜しむには非らず。かりそめの口ずさみなりとも、その添削を、こむとするには、必愼みて、指揮をこふべし。況むや、未聞不知の人にて、人づてに其の添削を請はむとするをや。これを謝絶するは素よりしかあるべき事也。これ教ふる人、教へらるゝもの、互の禮也。近世、新聞、雜誌等に廣告し、或は、詠歌添削の門標を掲げて、一首壹錢長歌は五錢などゝ、賣物の扱する學者もありと聞けり。時世のかはり、あるひは翁の謝絶を疑ふものあらむかと、聊こゝに、其の意を附言す）

また十五夜に、當座の御題など出で侍らむには、

御三人、能々云ひ合せて、いとおしからむ事をもかたみに直しなどして、出し給へ。

（此の垂訓も、また、歌詠むもの丶、眷々服膺すべき事なりけり。順徳院の朝、内裏の御會に、行路柳といふ題にて、定家卿が、

道の邊の野はらの柳もえそめて
あはれれもひのけぶりくらべや

と詠みて奉りしを、後鳥羽院、御覽ぜられて、不祥也との逆鱗より、遂に勅勘を蒙り、出仕を止められたる事ありき。これ詠歌を、人に見せざりし過失なりとて、彼の流を汲むものは、深く自警すべき好話柄とせり。

在原行平が、芹河行幸の供奉仕へ奉りて、

翁さび人などがめそかり衣
けふをかりとぞたづも鳴くなる

といふ歌を詠み、勅勘を蒙りたるも。正徹が足利義詮の障子の歌に七月桐を

ちらせ猶見ぬもろこしの鳥も居ず
桐の葉分の秋の三か月

と記して配流せられたるも、皆、この、人にみすべき事を忘れたるが故のあやまち也。忠岑が禁中の御會に

しら雲のたりゐるみねとみえつるは
高嶺の花やちりまかふら舞

とよみて、躬恒に見せしを、躬恒が、つらく吟じみて、云はく。天皇の御位をさらせ給ふを、たりゐるとまねせた、禁中にては、然るべからさらむかといひて、遂にいださすなりぬるよしかたり傳へたるも、亦同じ心はえなり。如何なる名人といふとも一巳獨斷にて決したる歌は、過失なきて

とを保し難かるべし。かゝる堪能の先達にても、猶かくのごとし。ましてやそれよりくだれるものをや、翁の此の垂訓、蓋、これらを思食してなるべし。）

若又、出來侍らずとも、題のみ給はりて、そのあすなど、こゝへ見せ給はゞ早々直して參らすべし。されど、空よくとも、十五夜には、ゐなかへまかりて、十六日の晩に、かへりぬへし。十七日に、奉りてもよくと、十六日の夜なほし置きなむ。去か、心得給へ。すべてわろき歌を出さむよりは、出さて、練りて後に、出すが良きなり。功者に至りても。時によりてふつにいてこぬ事のあるもの也。よりて、れのれなど、大方は、當坐は、よみ侍らで、後によみぬ。俄に、速く、いひ出すを、手がらとする人は、まだしき事なり。歌はよまれぬ物てふ事を能く知る人は、中々に其の時詠まで、後より出すを褒むる物なり。

（古人は、良からぬ歌を評して、脂燭一寸がほどに十首ばかりよみたる歌のごとし、と云はれたる事あり。近き世には、拍手三つがほとに、壹首を詠めと敎へし人もありとか、かはり行く世は、樣々なれど、堪能の際となれど、其の云ふことは、古今同一轍なるへし。翁が此の敎、敬伏するに餘あり。されど、練習と、はれの歌とは、少し區別すべきか、練習には、口輕く、數を重ぬるも、亦一手段なるべし。はれの歌は翁のこの論、ぬきさしする所は毫もあらさるべし。但百首の歌などは、其の中の、二三首に、我かあらむ限の力を盡して、さて外は、たゞ、うち思ひ寄る儘を、列ねべし、と、先哲の口傳にはいへり。かゝる時には、これも一手段なり。百疋の黒駒に、からくられき

て、都大路に引列ねたらむやうに詠まむといひしは異例の時の事なり。又當坐の事も、思ふどちまとゐせる夜など、さむかり、つゝみをらむも興あかるべし。程能よみれきて、後に能ねりたらむこそ、めやすかるべけれ。翁の論は、はれの會に對しての事なり。かたくなに、思ひ誤る可からす。）

すべての御心得の爲に、申れくなり。これらは、御三人へも、傳へ給へ。（以下次號）





二十一代集七夕歌寄（續）

落合爲誠　寄贈

故人　藤　伊季輯

新勅選集

彦星のゆきあひをまつ久堅の
　天の川原にあきかせぞ吹く　　鎌倉右大臣

鵲のよりはの橋を餘所ながら
　待ち渡る夜になりにける哉　　殷富門院大輔

天の川渉らぬ先のあきかせに
　紅葉のはしの中や絶えなん　　法印猷圓

天の川うき津のなみに彦星の　　藤原敦仲

つまむかへ船今やこくらし

思へともつらくも有かな七夕の
なぞか一夜と契り初けん　基長

天の川星合の空も見ゆばかり
立な隔てぞ夜半のあさきり　藤原在良

七夕の我が心とやあふことを
年に一度ちぎりおきけん　經輔

草の上の露とる今朝の玉章に
軒端の梶はもとつ葉もなし　正三位家隆

たなばたの天の川浪走かへり
このくれはかりいかで渡さん　伊實

續後選集

あきかぜの吹き漂はす白雲は
七夕つめの天つひれかも　讀人知らず

一年に唯今宵こそたなはたの
天の川原にわたるといふなれ　赤人

久堅の天の川邊にふね寄せて
今宵か君かわたり來まさむ　山上憶良

七夕の如何に定めて契りけん
逢こと難きこゝろなかさを　堀川右大臣

天の川淺瀬ふむまに更る夜を
恨みて渡るかさゝぎのはし　從三位行能

あまのかは霧たち渡る七夕の
くもの衣のかへるそでかも　人麻呂

續古今集

あまのかは水かけ草の秋風に
なびくを見れば時は來にけり　赤人

天の川やすの河原に船よせて
秋風吹くといもに告げはや

天の川霧立わたりけふ〳〵と　小野贈太政大臣

我が待つ君の船出すらしも

天の川くもゐをわたる秋風に　　光明峯寺
行合をまつかさゝぎのはし

天の川けふの船出は程もなし　　素暹法師
ちぎりぞ遠き渡りなりけり

鵲のくもゐの橋のとほけれど　　正三位知家
わたらぬうちに行月日かな

七夕の戀や積りてあまのかは　　中務卿親王
稀なるなかの淵となるらん

如何ばかり嬉しからまし七夕の　　六條右大臣
待夜の數のあふ夜なりせば

逢ふとてもなれすやあらん七夕の　　康資王母
間遠にきたる天のはころも

あまのかはまたはつあきの短夜を　　匡房
など七夕のちぎりそめけん

天の川いかになかれて七夕の　　中納言爲氏
としに逢瀬はかはらさるらん

天の川もみちの橋や秋を經て　　天臺座主澄覺
渡れどたえぬ錦なるらん

竹の葉にあさひくいとや七夕の　　前大納言忠良
一よのふしのみだれなるらん

續拾遺集

いつしかと風渡るなり天の川　　前内大臣
うきつの波に秋や立つらん

七夕のゆきの衣のあきかぜに　　經平
あふたのみとや今宵まつらむ

契りけんこゝろの程も彦星の　　上總
ゆきあひの空に誰か知るべき

淺からぬ契とぞおもふ天の川　　實家
あふ瀬は年の一夜なれども

としにまつ習ひつらき天の川　　隆　　康
逢瀬はちかき渡りなれども

（未完）

主從教草

諏訪忠元　寄贈

はしがき

一日深川なる土屋ぬしの家におとづれたり、折しも殘の暑さたへ難く、とみにかへるべくもあらず、家の人の日影のかたむく頃迄休らひ給へとて、風の涼しく通ふ所にあないしぬ。打ちみれば、くさぐ〵の書類そひらかれたる、元より好める書のことなりければ、とりてみる中に、主從教艸と名付たるあり、いかなる書にかあらんと讀もてゆくに、主從の間の心得を、もばらときたれど、又大に人の心得となるべきふしそ多かりける。さて今の世のさまをみるに、日に月に萬の道いやすすみに進みたるは嬉しき事なれど、一得一失はまぬかれ難きことにて、やう〵人の心の薄くなりぬるは、うれたきことゝもなり、殊に世に學者として知られたる人の、其の身はよの教育者にありながら、其の行のゐをさまらざるは、さくもかた腹いたきかぎりなり。おのれこれらの事を見きくたびに、いとあぢきなく思ひしを、ゆくりなくこの書をみて、其の記されたること今の世のいましめに叶ひたるも悦しくればゆるまゝに、ひとりみむもあたらしければ、多くの人にもみせまゐらせんとて貴社にたくりぬ。

付云、此書の著者壽福軒眞鏡なることは、其の自序のあるにて知らるれど、其の本名たれなる

かわきまへず、其の記中あまり佛説にかたむきたるは省きつ、又其の文中語格のたがへりとれもふふしあれど、元より文章の上をみるにあらず、只其のとく所を旨としたれど、改めず、かつれのが心にいたく感じたるふしには圏點をつけて世の同意をこふになん。

自序

凡主君たる者、貴賤上下の品はあれども、家來の使ひやう、又出入の者迄も、用ひやう至て大切也。是を秤能使ふ事をしらざれど、國家治りがたし。まづ、召使ふ者に對して哀れみをたれ、罪科をながめ、萬事に付てよく堪忍すべし。主君の心はしたなく、召使ふ者にはげしくあたれど、其の家和合せず、和合せざる時は、國を治る者は國亂れ、家を保つ者は家騒ぎて災ひの基となる者也。折角扶持して人を養ひながら、其の召使ふ者の爲に恨みを受るやう使ひなす事、是大なる損にあらずや。召使ふ者主君に恨みあれど、日頃の恩を忘れて、あだをなさんと思ふもの也。又主君に情ある時は、年來の述懐を忘れて、我一命をもかへり見ぬものなり。少しのあやまりあるを以て、大成忠功をいたづらになし、追出し滅却する抔、大なる僻事也。又家來たる者は、忠義を盡さずしては、出世の道ふつになしとしるべし。人として人を使ひ、人に使はるゝ事を知らずんど、その身をさまりがたし、上下共に大入用、是を深く考へて此の本の始終を見るべし。

凡いましめとて、假名書の本世に行はるるもの多し、然れ共、文章花車にして、學問の力を以て敎たる故に、末々の者は大方合點ゆかず。此の故に、聞いれ安く、見るに苦勞なきを勘辨してしるす者

也。依て文理も属せず、文字の相違もあり、又言語のいやしきをもかへり見ず、只早く合點の仕安きをよしとす、見人笑ふべからず、唯何も玄らずして書しは大笑ひ。

文政六未歳正月善修日

東都淺草新寺町
壽福軒　眞鏡述

主從敎へ草前編

主從心得の事

利運談の恕の利運にいわく、夫富貴榮華は上下共に好み、貧乏困窮は上下共にきらひ。あまき物は上下ともにあまく。苦き物は上下共に苦し。樂む事は上下共に樂し。骨折働く事は上下共につらし。是人情の常也。それ恕とは、心の如くと書て、己がいやと思ふ事は人にほどこす事なかれといふ儀にて、諺にいふ我身つめりて人のいたさを玄れとかや。おのれが好む所は他人も好む所にて、貴賤同様なれど、此の人情をかぎて、他人はあつ　共さむくともかまはず、自分のみあつくなく寒くなく、うまき物を食すれどかまはぬといふ人は、是は思ひやりがなきゆゑに、他人は勿論、下々迄歸伏せさる故に、上の見ぬ所にてはわたくし多く、倹約をいひつけても用ひずして無益の失ついをいだし、内心が上に逆ふて和同せざる故、諸事みな表裏がありて損失多し、殊に下々奴婢の情は、夜は早く寢たがり、朝はおそく起、立居振舞の叮嚀なるを難義がり、敎へらるゝ事をいやがり、冬はさむがり、夏はあつがり、手足の折骨事ををしみ、さまでなき物を見たがり聞たがり、小歌、はなうた、ぬすみ喰ひ、大あくび、居ねぶり、戸障子をあけはなし、疊さはりあらく、何一ッとして主人

の氣にかなふ事なきもの也。斯の如き者を召使ふ人は、此所を大体思ひやりてつかわねど、片時もゝかはるゝものにあらず、又是を早速に直そふとて、容易になをるものにあらず、是を直すには、兎角堪忍が専一なり。其の堪忍といふは、則恕やらねど出來ぬ事也。まづ物をいひ付ても。三度に一度はほめて遣し、折々は敎へて段々とまがりを直し、氣長に使ふ時はいつ直るともなく、麻につるゝ蓬の如く、しせんとよき方にうつりうつりて、終には主人の敎へは有がたきものと思ひ付時は、下々よりも上を恕りて、傍輩一致して萬事の取行ひ出情するに於ては、是も主人の爲、かれも主人の爲と、無益の失ついをはぶきて、陰日向なく働く時は、身人の利益徳用いくばくなる事か量るべからず、かく下々は主人に忠節を盡し、徳用をつけ、大功を立る時は、自ら主人も其の仕業に感じて、恩賞を與ふる必然也。故に、古往の名將智者は勿論、百姓町人といへども、此の人情を盡し、恕やりの深き輩は、昇進出世して、世に何某と呼れ、大家をなさざるはなし。これ恕の利運也。此恕やりといふ事は、なくてかなわぬ事なり。孔子も我道は忠恕而已なりとも、又己欲せざる所人に施す事なかれども仰せられたり。誠にしかり古今集に、賢敬法師の歌に

かたちこそ深山がくれの朽木なれ
心は華になさばなりなむ

東鳴鶴聲（じき）

朧昔牛

枕詞、マクラ詞より續くノ。文字は、譬へば、黄葉の過にし。行水の歸らぬ。やくやもしほのみもこ

がれつゝなどを、如くの意を入イ、聞べしと云說は取に足らず。こは姑く其の詞の端を起さんなる爲のみにて、黄葉は散て過ぎ、行水は流れて歸らぬものなれど、只過にし、歸らぬの言をいひ出ん料のみ、〃文字の如くの意あるに非ず。もしはのでかれつゝも、是に同じ。猶玉だれのをすの大予山の端のまつこと久に。などいへるに、同し意はへと知べし。玉だれの如くをとも、山のはの如くまつとも、聞かれざるが如し、況や下つせの鮎をくはしめ、くはしめにといひ、卯花のうき事などいへるは、只其の聲を合せ、只其の韻を受るのみ總て序枕のたぐひに、詞を添へ、心をこめては、中々其の詮なき事也。さるを、白玉の吾子、三日月の眉ねかき、などいへる〃文字と、同しことに取れるは、愚かなり。

又曰　或日賴山陽來りて、詩を出して論する事ありしに、對句の所にと、つかずして、付やうにすること難き業なり、此所に詩の意味ありと云。師云、我歌に枕詞といふことあり、もと枕は、人臥時は、肩の幅につかへて、頭疊につかず、頭と疊との合を、よくつめて、其の工合を能くなすが故に、其の者こゝちよし、歌も其の如く、足らぬ處をと、加減よく物を入るゝに依てなり。此所に肉をつけ置は、いと見苦しく、頭もまはるべからずして、不自由なるべしとのたまへり。

昔生云、むかしは、新按の枕を作るに、妙を得たる人多かれど、今は舊き枕を借て、足れりとする者少なからず、こは皆古へに泥める弊ならんかし。

調ヲイタハル、義理を忘れて、調べをいたはるこ

と、土佐日記、正月九日の文に、これより今は漕はなれて行、これを送らんとて、そこの人どもは、追來ける、かくて漕行まに〳〵、海のほとりに、とまれる人も、遠くなり、又舟の人も、見えずなりぬ、岸にも、いふ事あるべし、舟にも、思ふことあれど、かひなし云々。これも、舟の人も見えず成ぬべしとある、べしを省きて、次なるいふこと有べしへ、疊みて聞せたり。又古今集に落たぎつ、瀧の白玉拾ひ置て、世のうき時の、涙にぞかる。これらも、かるべしの、べしを省きたるなり。同序に、萬の言の葉とぞなれりける、とあるも、萬のことのはとぞ、なれるものにざりけるなどいはでは、理りは叶はぬ事也。是皆調べをいたはりて、義理を忘れたるなり。

調第一、シラベとゝのへど、趣向はあしくても、歌なり。又歌となるは、趣向のよき故なれどなり人もおのれかくの如き事は、惡しと思へど、則直さんと思ふ心づかひに及ばず、惡と思ふ、それすぐに直るもとなり。

昔生云、趣向と作爲とを、同視すべからず。人各其の意の趣向ふ所は、實際の感なり。自然の感なり。新の義理を求めて、思想を作るは、則作爲の妄語なり。

調は思情の俤、總て言語は、俤を詞もてたつるなれど、活物にして、更にやむものに非ず。世中鬼神なしとみれど、あり、有とみれど、在所をしらずして、更に無し、此處甚むつかしき所也。たとへど、吾足は摺りこ木の如しといふ時、サヨト諸合ふなり、さるに足の摺木になりたることなし、其の勞を、これにて見するなり。總て比喩は、其の

句ひをかりを取るなり云々、依て感は詞にありて道理になきをしるべし。

歌の解、萬葉に、さをしかの妻こふ山の岡へなる早稲田はからし霜はれくとも。是序歌なり。調べに暗き故、此の歌を氣色と見たるは、誤也。掉鹿の妻こふ山の岡べなる、といふ、打つけの實景ならんや。其の岡べの早稲田は、刈るべきものを、からじと云事、今俗兒女のもの心つくを、早稲など云如く、其の早稲田にたとへたる妹は、霜のれく迄も、外へはやらじ、我契りたれども云也。されど歌の文面に、妹となけれど、先哲皆々氣色にとりて、聞損なへり。知る人これを知るべし。



浮世いかた舟

作者不詳

人に癖ある事

今はむかし、もろこしの杜預に左傳のくせ有、樂天に詩のくせあり、といへり。されどこそ、慈鎭和尚の歌に、

人によりひとつの癖はある物を
我にはゆるせしきしまの道

まことにくせもくせによりて、よきも有りあしきもある。世の人高きもいやしきも、かならず一ッのくせ有り。いはゆる錢のくせなり。はしきか上にもはしがりて、晝夜朝暮にわするゝ事なし君子とてもよくなきにはあらず、とるべき物をとり、とるまじきをとらず、それに、とられもせぬ所に、無理によこしまを以てむさぼりとる癖の有ものは、是道にかな

はぬ小人也。かやうの人を大名になしたらば、百姓はひとりころびにたふれはつべし。老出頭奉行になしては、ひいきへんばのわたくし有て、非公事もかち公事となり、國家うれひのもとゐなるべし。よく思ひわきまふべし。浮世坊はとんせいしけれ共、猶放道のくせ有。げにも習氣の煩腦は、さとりをひらきし聖人のうへにもたらぬものにや、佛弟子の舎利弗は、くはその世に大蛇にて有りしが、人と生れ佛でしとなり、羅漢のさとりを得ながらも、瞋意の相つねにれもてにそなはりし。孫陀利難陀は過去の世に○○に○○れし人なりしが、今佛弟子となりても、○のかほをみる事をこのまれたりとかや。いはんや放道にしみ入たるものは、死して白燒になるまもでわすれがたきものなり。あな、愼までやは。

○賢人の事付狂泉をのみし事

今はむかし、浮世坊こゝかしこまとひありきけるに、わかきもの共四五人ゆきあひて、さま〴〵なふり物にす。浮世坊もにせものにて、なぐさみがてらと思ひ、うちつれて是にあぜあひけり。ある者いふやう、御坊は賢人にてましますやうにみね侍べるといふ、又かたはらよりは、物ぐるひで有さうなといふ。浮世坊きゝていふやう、それ賢人をもとむるには賢人を以てもとめ、賊をもとむるには賊をもつてもとむるといふ事有。今はしらず、ぬす人をもとめんがため、目あかしをつれてさゝする事はあれ共、賢人を求めんとて賢人にもとめさする事はなし。さるほどに、たまたま世の中に賢なる人もあれ共、うづもれてしる人是なし。又賢なる者は世にれちぶれ、へつらふものはさかねゆく、それらのまなこくらみは、たま〳〵賢なるものをみれば、そのれが心の如くに

いやしからず、人をへつらはず、有のまゝなれば、やがて此人をじまんくさきものよ。狂人らしき人よ。りくつもの。いつてつものなどさたするほどに、人みな聞つたへて、おなしやうにいひなし、思ひなす。然共、賢者は是をもうらむる事なし。人しらず、しかるをいからず。と論語に書たり。かやうにそしるやつばら、賢人のたのしみはしるまじや。又道をしれる人も、道行はれざる時は、卷てかくすといふが如く、ちからなく、世の風俗にまかせて人をへつらひ、賢者ふりもいらぬものぢやと思ふうちに、いつの間にやらん、上々のへつらひものになり、よくふかくなるも有。又賢をたてゝおこなはんとする人を、そばより意見して、上代こそ賢人も用ひられたれ、今はするの世となりて、賢の道はすたりもの也、只人なみにさしませ、あらむつかしの論説風や、あらいやの延喜式や、何も柳にやりてよ、谷のながれも雨ふればにごるなどいはれて、大勢のかたにいたきいれられて、へつらひものになるも有。武道をたしなむ侍も武道あがりては、傍輩のぶたしなみ成者共かまはせもせず、出頭人もにくむ故にをのづからぶたしなみになり、心だていやしくへつらひ出るも有。昔もろこしのある國に、狂泉といふ泉有り。此水をのめば、そのまゝ狂人になる。國中の者是をのみて、上下男女みな狂人也。その國のあるじ一人、みつから井をほりて水をのみけるほどに、狂氣せざりけるを、國民かへつて國の守ものにくるひ玉ふとて、灸をいたし針をたて、いやがる物を無理におしふせ、大勢とりかゝり養性さするゆゑに、國の守是をめいわくがりて、みづから狂泉をくみてのみたれど、同じ物ぐるひになりたりといへり。大勢の中に、一人二人、

たま〳〵賢なる者有とても、かへつてむつかしがりいやがりて、狂人、いつてつものといひなして、わしこめ、うぢもちかしてもちひざるまゝに、力なくへつらひものになり行く。されど、某を賢狂ものにの玉ふれの〳〵の心ざしはいかなるらんと、心有かはにかたりけれど、此侍共けにもと思ひ、ちか比おもしろき御坊かな、かやうの人は重寶になるものぞ。いざ我等のかたへ來りてあしをとゞめ玉へといへど、浮世坊はさそふ水あらばと思ひしに、よき事なりとよろこびながら、さらぬよしにてうちつれてぞかへりける。

此の紀行は、熊本藩主細川越中守源宣紀朝臣の第四女にて、宇土藩主細川大和守源興里朝臣の令夫人の、天明のころものせられしを、予が祖母高濱氏が、宇土の奥殿に久しく仕てありしとき、令夫人の手づから賜し自筆のものとぞ、此度女鑑に寫出て、貴女たちの温古知新の料に供す。

肥後　佐々豊水

紅葉のたびの記

肥後國日奈久の温泉に湯あみせんとおもひ立て、ことし天明二の秋八月廿二日辰時ばかりに江都を立出侍りぬ。きのふの名殘風少し吹けれど、空いとよく晴る、先品川の茶店に休む、此所までは、堀本の何某、福田賴雄を初、其の外送りの男女數多有けれど酒汲かはし故郷の名殘ををしむ、龍口よりも清見局送りにとて、二本榎までまゐる。餞別あまた有が中に、扇に短冊を付給ひたひ、

たびごろも立わかるとも來んはるの
はなにはこねよあふさかのやま

と有ける、御かへし松の枝につけて、福田にてとつてまゐらす、

秋きりのたゞしはよそにへだつとも
　はるはかすみのたちかへりこん

とよみしつけてまゐらす、川崎にて休む、猶此所まで南波來る。暮近きころかな川のうまやにつく。

二十三日　辰に過る頃舎りを出る、かな川の茶店に休らひ海つらを見渡して、

朝きりにれきゆくふねのほのみえて
　かせもれとせぬなみのをちかた

と口すさみ、是より歩行にて行午時過る頃より雨降出けれど、駕に乗りて藤澤のうまやに申時過る頃舎りをとる。翌日はいかならんと思ふのみ。

二十四日　さがみ川留りぬ。尾張中納言御參向、久留米少將も下向にて、さゝはる事多し、やどをかへなどし侍りける所、川口あきたるよし告しらす、今夜は此處に枕かさねんと思ひしに、いとうれしく午に近き頃舎りを出ぬ。かねて小田原までと心ざしゝかど、大磯に舎る、翌日は佐川を越ゆるなれど。

二十五日　夜をこめて出よと云まゝに、とらの刻ばかり立出る、空暗て明ぼのゝ氣色いはんかたなし、

いそ山のふもとばかりはきりこめて
　ちさとにつゞくなみのうなばら

小田原のまつ原より富士を見て、

やまやまの色はわかれてむらさきに
　あさ日うつろふゆきのふじのね

行々此の山を望む、

雲きりもくもりみはれみあさなゆふな
　ながめぞかはるふじのたかねは

江戸より見しにも彌まさり、げに三國第一之山とれ

もふことになん。箱根の御關所もつゝがなく越ゑて、暮近頃峠の舍りにつく、此の舍り向は湖を見渡し、山々の中に富士はいや高く見ゑて絶景なり。こよひ初夜過る頃、長光山和尙來てこむし物語し侍る。

二十六日　辰に近頃舍りを出るも、名殘やはなき、けふは箱根の山を下りて、富士見たひらと云所に憩をとゞめ山々を見渡す、空くもれど富士はまがふべくもあらず、中にそびゑて見ゆ、けふはら、よし原を通れど、わきてふじの名殘と聞に、歩行をせんと、先三島明神へまうづ、此所にて晝のかれ飯をくふ、立出けるに、ひつじの時頃より雨降けれど、のちは晴もやせんと思ひて行に、

　ふじのねはそれとも雨にみゑわかで
　　たちまよふくものうきしまかはら

とりに過ぐる吉原のねきにかりねの枕をとる。

二十七日　卯過る頃出る、田子浦へも行て見る、小石など拾ふ、それよりさつた峠の茶店にこしやすむ、此所より富士よく見ゆる、うち出でみれはといへる言の葉は此所にぞあらん、

　田子のうらや汿たるれきにさをさして
　　ゆくともみゑぬあまのつりふね

けふは道も十里にあまるなれど、秋の日程なく暮けれど、見殘したる所々もこそあるらめと口惜事になん。いぬに過頃府中の驛につく、此所の細工物の調度あまたとり寄見侍りて、子に過る頃ふし所に入ぬ。

二十八日　卯の刻過て舍りを出る、阿部川もやすらかに渡りて宇津の山にかかる。蔦の細道はいづくならんと問しに、今は草木茂りてそこともみゑず、といふ、是なんいにしへの蔦の細道にてありなんとをしへけれど、

旅ひとのゆきゝもいまはあとたえて
名のみぞのこるつたのほそみち
大井川いかならんと思ひしに、向にちかく山もみえておもひしよりは大河ともおほえず、瀬は淺しといへども早く流て、手まりの大きさなる石水底にまろびゆく、とかうして暮近頃金やにつく。

二十九日　辰の刻ばかり舍りを出る、さよの中山程近ければかちをゆく、西行法師の年たけてといへる古言も思ひ出られて、
吾も實にいのちなりけりまちまちて
けふこそこゆれさよのなかやま
とひとりだちて、新坂のやどりまであゆみ行、かけ川にて晝のかれいひくふ、けふは道も近ければ三かの橋のほとりまであゆみ、申の時ばかりに見付の驛につく。

晦日　卯過頃出立、けふは天龍川、今切の渡、御關所もあるなればひまどらんとて、近道へかゝりてゆく、思ひの外にはやく來つきて、ひつじに近き頃舞坂へつく、舟粧ひ何くれとひまどりて、やうやう船に乘、風も汗たる夕のけしきいはんかたなし、
音にきくあら井のなみもしづかにて
やすくぞすぐるふねのおひかせ
御關所事ゆゑなく通りて、酉過る頃白すがにつく。

九月朔日　卯過る頃舍りを出る、岩屋の觀音も近所と聞ば、まうでんと林下をあゆみ行、左右うち晴し野路なり、岩屋へ詣て小松原を行、それより駕に乘りて、酉の刻ばかりに岡崎につく。

二日　卯に過る頃出立、松原を歩行、八橋此ほとりといへば立寄てみる、業平の像、自作の觀音、八橋の橋板などみる、發句などさまざま書付有ければ、

みづからも心にうかぶことを書付侍る、

むらさきのゆかりもとめて旅ころも

はるばる來しもねにしなるらん

笠寺の觀音、熱田へも詣で、暮過るほどにみやにつく。

三日　けふは桑名の渡を越るなるに、よべより雨降ければ海上ればつかなきと、船出もならざるよしいへど、さやへまはるべしと云に、まかせて行、雨にて道の程もいぶせく、やうやうさやへ着ぬ、俄のことなれど、この人數乘べき船調がたきよし、とみにも成りがたきなれど、こよひこのやどに泊りなんと云に、心落つき居る所に、歌山、見保崎北のはかも來りて物語りす、白杉もみづからの跡より旅たち侍りけるが、はからずもこの夜此所に來りて對面せしよろこび、ともに初たびのめづらしきこと、何くれとかたみにうち語らひ、子に過る頃、れのがやどへ人々もかへれど、さらばとてかりねのまくらを定む。

四日　けふも卯に過る頃出立て行、空もはれ、ふねのよそひもよきといへど、いそぎ乘、風もなく海つゝ波閑かに、行ままに、思ひしよりははやく桑名の舍りにつきぬ、しばし休らひ、けふは石藥師迄行はづなれど、とかうして四日市に暮過る頃來つく、翌日は鈴鹿山を暮ぬまに越よと案内しりたるものゝ云ふにしたかひぬ。

五日　夜をこめて出侍りけれど、ひまどりて極よりはれそくなる、半道ばかり行に、はや夜は明はてぬ、そのうへ雨も降出しけれど、只急ぎにいそぎて鈴鹿山を申に過るころ越る、しばし休けるまに、日も暮ぬ、土山　は二里餘の道をまつともしつれ、から

うして戌に過る程宿りにつく。

六日　明ぼのの頃宿りを出る、雨しきりに降出し、をやみもなけれど、いぶせきこといはんかたなし、歩行にてゆかんこともかたく、横田川此雨にては水かさまさん、渡もおぼつかなきよし人々いへどいそぎ行、所々の砂川も水出て、やうやう駕をたすけて渡ぬ、夕つかたは雨もをやみて、梅木村和中散にて休む、草津の驛に今夜はかりの枕をとる、よもすがら雨の音枕に聞えていぶせき宿りなれど夢もむすばず、

うきことはしらぬ旅ねもあめのよに
むすぶくさ津のまくらつゆけし

七日　けふは伏見の泊りと定ける、過し頃のあらしに勢田の橋も半は絶えて往來ならずとて、湖の流の末を舟にて渡なれどひまもいりなん、朝とく出よといへど、明渡頃宿りを出る、雨もやみ、晴ぬれど、石山へ詣でんと、行道にて鏡山いづこならんととへど、雨雲晴やらず、此邊よりはみえず、しばらく有て石山に至る、ここかしこ見廻り、ふし拜みつつ、紫式部のかの物語を作りたまひしと云所へも行て、數の寶物共見侍りぬ。古しへは此所よりも湖もみえけるにや、年ふれど木立茂りて今はみえず、湖を見渡しなど、嘸あらんと思ひ侍りぬ、粟津の原よりは鏡山いとよく晴てみゆ、

見てやゆかん名にしあふみのかがみ山
やつるゝたびのすがたながらも

繪書るをのみ見し近江八景も、けふ目のまへにみるうれしさ、石場の茶店に休らひてみれど、比良の高根間近くみえて、湖水まんまんたる海のおもてみわたさるゝに、舟の行かふさま、打出のはまあとの追風

といへる言の葉さらに思ひ出られていにしへをしのぶる、大津にて晝のかれ飯くふ、伏見の御館へつき、こよひはやすく旅枕をとる。

才くらべ（續）

蓬生屋女史

小坊主の頓才

むかし奥の山、北谷の覺城房の阿闍梨と云ふありけり。ある夜、庭まだらに雪ふりつと見えて、木の間がくれの月、ただもしろきものから、椽近うすのこうち敷きて、ひとりながめをりしが、友ほしくやありけん、子供たち來れ、此の木の間がくれのあはれの月影を見よやなど呼びたつるに、小坊主ども四人、五人、かけ來りて、如何にながむるか、もろともに影をやどして、はやしたつるに、阿闍梨は幼き



もの相手に興がりをるに、月讀の神はづかしとや思ひけん、松の木陰にかくれ入りて、赤松の梢てりかゞやきたるに、阿闍梨、松をまでめでたがりて、かれは、そも男松にや、女松にや、いとうるはしきかげよ、汝たちは何れと思ふなど問ふに、年とりし一人の童子、さやうに侍り、松ふぐりの赤きは兼ねて男松ときゝはべりと云ふに、月のさはりのあるからは女松にや侍らんと、今一人の小さき坊主の言葉に、阿闍梨、いとゞをかしがりて、

　男松とも我はえいはじ女松とも
　　定めぬかけを月にまかせて

と狂歌さへよみていよ／＼興じあへりとかや。かゝる罪なき頓才は、時にとりて興を添ふるものぞかし。

笑ひ草

薫風仙史

仙史いまだをさなかりつるころ、里のとほりことどにて、人のおろかなるを見ては皆人これを「たく」といひ、うつりて人をそしるにも「たく／＼」とのみいひつ。これは東京などにて馬鹿或は間拔などいふにあたれり。是に深き仔細あり。近きあたりになにの宅藏といへる白痴あり。仙史覺えてよりこの男はや年三十路にもなりながら常に鼻汁かきたらして、そこゝさまよひありきけり。この宅藏總領に生れながら、かゝる白痴なれど、家はその弟なりけるが續ぎけり。宅藏といへば誰知らぬ人もなき聞えたる白痴なり。性質酒をたしみて、酒を見ては目も口もなし。身の藝とては、子守の外には田をすきかへすに馬の

鼻取をするばかりなり。物の數をかぞふることはもとより知るべくもあらず。人金錢を與へんといへどいらずといふ。これを用ゐて物を買ふことをも知らねばなり。かゝる男なれども身の苦樂はよくしりて、人、馬の鼻取にやとはんといへど、けふは腹いたくて得せずといつはりてふりむきもせず。これこゝに酒ありといへば直にその口にて强てもその業をつとめんといふをかしさかぎりなし。常に弟の生める子を背負ひてその守をせり。ある時のことなり、弟何事にか腹たちて、いたくのゝしりて、そなた如きものは世に用なし、たゞに死なれずば、水の中になりとも入りて死ねといひしを、この宅藏何とか思ひけん、ふといかりたる面もちにて草鞋をはきて家を出たり、さて道のはたなる川の水膝ばかり深きところに入りて、裾をかきあげてあちこちと、水の中をゆきかへりして居たるを、そこを通りあはせたる人、つく〴〵見て、この宅藏何をかするぞと思ひて、しばし見てありしが、こや宅藏そこはたゞ水の中をあちこちありきて何事をかするぞと問ひしに、さればなり。我か弟物もおしらず、我が常に子守をして手助をするに、かへりて吾に水になりとも入りて死ねといひしかば、腹立しくて死なんと思ひて、とくよりかく水に入りてあちこちとありけども、何故にかいひしが如くにはいまだ死なず。とて、淚はら〳〵と落すに、通りあひし人をかしさにたへずふき出してわらひしとてこのことをちこちに聞えて鄕人の笑草となれりし。この宅藏三十五六にて身うせて今はなし。膝ばかりの深さにても、はた水は飮まずとも、水に入りだにすれば水死すべしと思ひけん心のそこのあさゝもくまれてをかし。

須磨の月（其五）

白魚女史

如何なる玉章を厂のれとし行きけむ、あやしの亂れ文、あしたをまちがでに母は大領にさし出して　よひ〳〵每に軒の松風に通ふ人ありとつげぬれど　流石に、時國之ぞかりは誠と聞きもとらぬを、妻女は、幾度か歎息の聲くもらせて、妾も、千度八千度くりかへし考へ侍れど、ふと出でたる庭もせに、あわてゝ忍び出るあやしのものかげと、すかし見るほどに、松風があわてやう、何をかとをかしう思ひつゝ、月のあきにまかせて下りたちて、なほ其處此處さすらひありく足元に此の白き消、名あてはあらねど軒のねのれとし行きしものとのみも覺ゑ侍らず、さては、松風のくるしき松の思をつげやりし文、たゞに雁があわつる袖よりかきれとしゝにや、されど、まさかと思ひ返へして、夜べも夜もすがら案じ侍りしかど、如何にもあやしきかげ、松風があやしき戸のくりやう、かゝる事聞ゑんは妾がふとりしまりなれど、申し上げんもくるしけれど、ごれど此まゝに捨てれきて、もし誠に住まふ人あらんには若きものだちの掟にもならず、願はくぞ殿、今夜の様子もろともに見も察しもし玉ひて、後をいましめ玉ひてよなど、細やかにかきくどきぬ。

松風はさる事あらんとは夢にも知らず、近き程に、人々と歌合せやせん、題は月前の雁やよけん。松風も村雨もあつぱれ秀ぐれてよみ出でよ、夜べも初雁、わつかに鳴きつる聲の聞ゑたれど、今宵もまた聲はすらん。のう、月の面にれもしろき影、まのあたりのさまをうつせよ、必ず劣り玉ふなど母なる人の言の葉に、同胞はたゝ赤き心のほどをよろこびかし



こみて、他に深き考へもなく、たゞよき歌よみ出でなん、早う夕べとなれ、さても、秋の夜の長さよ、**早う月さしのぼれ、折りよく雁もなど姉妹互みに云**ひあひて、待つをあはれと廿日あまりの月影、霧にむせびてさし出る影に、聲もあはれ、翅れもげに通ふ一つら、いでやとてかりに二人ひとしく端に出でゝながむる軒下に、たゞずむあやしきかげ、狗か、男鹿かとすかし見れど、こは、そも、人、人影ればろにさしぬるに、おどろきあわてゝ、雨戸ひき下せど、誰れぞ、其處には忍ぶ、者ぞもそれ捕へよと、時國がいきまく聲す。さやうにあらだで玉はで、此まゝと見過して、後の闕路たて玉はんこそ、のう我が夫、あらだてゝは世にも名立ち、聞ゆも高くやなり侍らんとて、いさむるは妻女が聲なり。

憎くき奴め、憎くき奴よ、まだ年はも行かぬ身ながら、男を忍びするとは何事ぞ、大領の家を汚すふらちもの奴、巳れ、手うちにして國人への見せしめ、**早う夜あけねとどかりて怒りの言葉**するどく、心とゝぎたつる名刀、手にして、明けなど二人を此處にひきづり出せといふに、母は今更にれそろしげに、身をふるはし、さりてはあまりと、涙をさしぬぐへど、袖には露もたまらざりけり。

凶をつぐるにや、あけ鳥の聲、はや端にかしがましきに、思ひねの夢やさめけん、いまはしき鳥の音よ、柿の實をねらひてにや、うるさしと乳母は窓あけて、手を叩き、つぶてうち追ひ拂へど、鳥ははるかなる梢にひきのきて、なほかまびすしくなくに、もしや、御二方の身につゝがあるを知らするにはあらずや、よべ、殿のあら〳〵しき御聲たて給ひしも、何とないあやしう思はるゝなどながむる曉、早く出せ、娘

をひき立てこよ、大領の家のけがれ、そゝがでやはれくべき、早う引き來れといきまきあらき殿の聲、奥方のなき音さへ聞ゆるに、むねとゞろきて、つきそひの女子の出るを伺ひ、事の樣子きけど、姫御が人を忍ばせたるあるまじき行ひを怒り給ひてとの事に、乳母はおどろき、姫が何とてさる事をと云へど、それは誠なり、おのれも一昨夜、奥樣と共にあやしき影も文も見つるはと云ふに、乳母がおどろきは一方ならず、地にもつかぬ足を强ひてふみしめて、姉妹が室におとなひしかど、聲も出でず。青き面、口のしびれざま、何事にやと二人はいぶかしみて仔細とへど、物も云はず、たゞ淚しぼりもあへぬに、何を、さは、乳母、何事にまれしばし心靜めよなど云ひて、佛に備へありし水とり出でゝ飮ますれど、やう〳〵うけ頂きて、いよ〳〵わきかへる淚を、れ

さへ〳〵て、姫君、誠にや、君は誰をか忍ばせ給ひつる。まさかさやうなる事をとは乳母は覺え侍るが。のう、誠をの給ひてよ、乳母にのうと聲もたえ〴〵問ふに、おどろく松風、顏あかめて、何をさる事と口の內に答ふれど乳母には聞えず、のう、姫君誠を、きかせ給へ、だまりておはすべき時には侍らず、早く、まこと、空事云ひとき給ひてよとせきこみてとふを、をかしや乳母、昨夜雁がねを忍ばせつるよと妹姫がはゝ笑みての答へ。いな〳〵、さやうなるざれごと聞くべき時ならず、父君の御怒りひとかたならず、姫が人を忍ばせつるを、あるまじき行ひ、けしからぬ。御手うちに遊ばさんといきまき給ふ。もし、誠ならんには、かくてはゐあられじ、乳母と共に、早う此處を忍び出る用意し給へ、あれほどの父御が御怒り、なだめ給はん人も今はましまさねど、

御身が一期、かゝる中も心せき侍り、姫御なひづからせ給ひそ。乳母ももうなき侍らじ、泣きそらるゝ時にもわらざりしを、おくれ侍りしよ、早う〳〵とせきたつれど、姫はたゞよゝとなくばかり、さては御手うちになり給はん早うとて、ひく袂を、なほ、ふりはらひて、峯の松風、吹きもたえなど、はだしの音もたえなん。此まゝにしてとて、わつと泣き入るに、さては、姫、なき名にやれはさん。かたき御心はかねて知るものを、誰がさる名をや立てたる。あやしとばかりにて、あとは互みにたきなす涙なり。



文林



岡紅葉　　東久世通禧

もすの音に驚かされてうちみれど
向ひのをかはもみぢしにけり

庭秋草　　佐々木高行

あれはてし庭のもゝ草おもしろし
心のまゝにさきみだれつゝ

茸狩　　高崎正風

立とまるわかあしもとの松たけを
くやしく人にとられつるかな

傾月　　長岡護美

沖つかせたかしの浦のあさしほに

おちゆくつきの影そたゝよふ

月　池田政禮

おのつからこゝろの中も澄わたる
今宵のつきをひとりみるかな

初秋月　諏訪忠元

年もはやいつしかなかはすきの戸に
さしいる月の影そさやけき

風告秋

秋來ぬとたれつけねともおのつから
をきの上葉の風に志るかな

をはな

いつのまにほにはいてけん初尾はな
わきたつやがてまねきかほなる

山路霧　竹屋光昭

松か枝のいろさへ霧のへたてたる

たひの山路のゆふへさひしも

雲外厂　宮地嚴夫

山のはの雲をはなれて見るからに
ちかつきにけりかりの一つら

風前厂　北郷久政

秋かせはふきすさめとも厂かねの
つらは一つもみたれさりけり

霧中山　鎌田正夫

此わたりわか故郷に似たるかな
さとのけしきも山のすかたも

菊をかさして　遠山英一

かさしたる菊のかをりは閨の内を
離れてのちに知られけるかな

野分　小出粲

あらかりし夜半の野分の跡みれと

あをき落葉ぞにはにたまれる

女郎花　三輪義方

散りやすき夕のつゆをかさしにて
すがたあだなるをみなへし哉

なにめづる心ならねどをみなへし
折りてかさせとなまめきにけり

橋上霜　橘忠照

朝まだきわたりし人やたれやらん
霜にあとある佐保のかりはし

紅葉　足立正枝

新ともならでのこれる山はたの
ひと樹のはゝそいろつきにけり

新羅三郎義光　菊池眞澄

笛竹のねもころにこそきこゆなれ
あしから山にすめるしらべは

折菊　木庭芳香

おく露のちるとも折らむ菊のはな
ぬれなむ袖に香こそしむらめ

秋水郷　石原均

秋の夜の月みかてらにみやびをの
ふねさしよするかはづらの里

秋のはて　松本操

老いぬれどさむさをいとふ心にや
なほをしまれて秋のゆくらむ

暁初雁　宇井正夫

暁の寝ざめのゆめのあとさむし
天の戸わたるはつかりのこゑ

月前折菊　安齋篤敬

おく露にてりそふ月のかげながら
をりてかさゝんしらきくの花

秋山路　近衛貞子

かきよせて紅葉をたきし跡もあり
秋のやまちをひとりこゆれど

庭秋草　蜂須賀随子

植しにもあらぬちくさの花さきて
つゆのたましくあさちふの庭

水上月　柳原愛子

下葉ちるやなぎの間より月さして
ゆく水しろしかものかはづら

朝秋風　小池道子

朝きりは今かはるらんやまゝつの
かけ見わそめてわき風ぞふく

汀鷗　松平健子

秋ふかきなかすの芦もをれふして
みきは淋しくかもめなくなり

水邊蘆　保科節子

あしかちる野川の岸にたゝすめど
水にもうつるわきのかげろふ

秋宵　原田蒼生子

やう〳〵に尾花の末のあかひかな
清けきつきや出てんとすらん

雋紅葉　高崎竹子

つたかづらもみつるまゝに山松の
緑もふかくなりまさりけり

秋森　中牟田常子

村とりのこゑかしましく聞ゆなり
もりの木葉のいろつきしより

紅葉淺　河村重子

露しものいたらぬ程そしられける
またいろあさき庭のもみちは

秋映水　　　　中島歌子

はすのはのやつれし池に影みえて
花にならたるにほのはぎはら

古寺虫　　　　海上壽子

終夜なく音絶えせぬ鉦たゝき
われし野寺をひとり守るらむ

月の影の中に

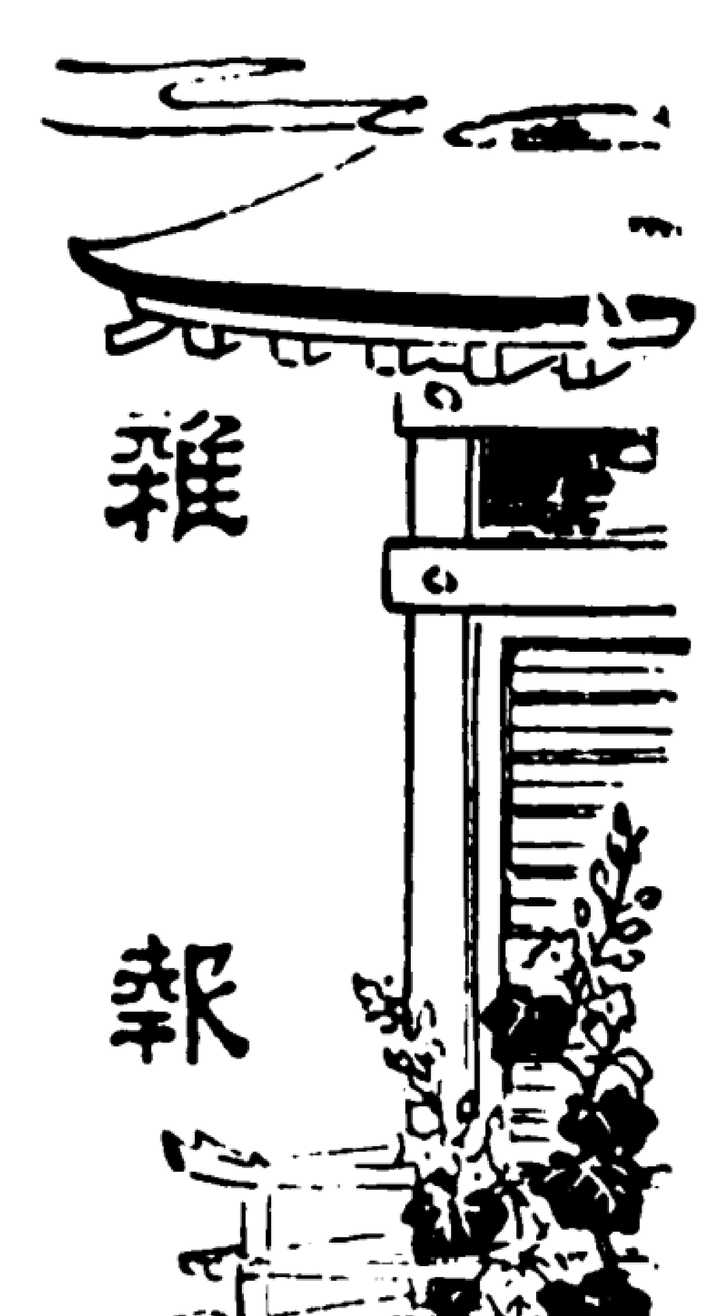
月影のさすにまかせてすみたがは
こゝろゆくせに舟あそびせむ

旅宿厂といふことを詠る歌並短歌　　　　海上壽子

内日刺みやこをさかり　敷たへの家をへなりて
草まくら旅のやどりに　ながつきの秋の長夜を
ねさめして心託をれむ　み空ゆく厂か音きこゆ
睦しきつまとやわたる　たまあへる友とや渡る
汝聲をひとりしきけむ　いとのきて友しえぬはゆ
ゆつましれもはゆ

短歌

なきわたるかりかねきゝて草枕
旅なるわれはみやこれもはゆ



●皇女御降誕　過般御懐妊の爲め青山御産所へ移られし　園權典侍は、去る二十一日午後以來御産氣にて夫々御用意中なりしが、去る廿四日午前十一時五分に至り、皇女御降誕在らせられたり。土方宮内大臣は、仝十一時五十分參内して、御降誕の趣奏上せられ。

御降誕の皇女は、其の後御健勝にまし／＼、園權典侍も御異狀なしとぞ。御養育主任は、楫取素彦氏夫妻に仰付られたり。本月一日御命名式を行はせられ

御名　多喜子

御稱號　貞宮

と御命名あり。徳大寺侍從長は直ちに御命名書を奉じて靑山御産處に參向あらせられたりと承る。竹の園生のいやさかにさかゑまさんこと、千代に八千代にかぎり知られずなん。

●おほみめぐみ　天皇皇后兩陛下は、本月九日靜岡縣下非常の暴風被害少からざる趣　憫然に思召され、御救恤として金四千五百圓を下賜あらせらる。

●藤樹先生の祭典　前號に報したる如く、藤樹先生の二百五十年祭は、去る二十五日、藤樹書院に於て行はれたり。祭典は午後二時にはじまり、院内には藤樹先生を中心として、左右に一族の靈位を安置し、「徳本堂」の勅額（百五十年祭の折　後水尾天皇の下し賜ひしものなりとぞ。）及「知良知」「藤樹書院」の二額をかゝぐ、祭主祭文を讀み終りて、折田滋賀縣知事、西澤書記官、杉浦重剛（代理）以下數氏何れも祭文の朗讀あり。式を了りしは四時頃なりし。此の日參拜せしものは七百余名にして、學校生徒の數は四千人に達したりと。

●中等教育と新聞雜誌　と題し、東京府高等女學校長心得なる岩谷英太郎氏は、先月廿日發行の茗渓會雜誌に一篇の論文を草して曰く、

普通教育を受くべき少年少女は、精神活潑にして、感情鋭敏に、未だ世故に慣れざるを以て、實際に過はざる事を想像し、常規外の行を爲さんとし、屢々神經を過勞して衰弱せしめ、身體の健康を永久に害ふ等、頗る危險の時期なれば、教師は綿密なる注意と監督とを要することながら、此等の注意監督は學校のみにて足るべからず、

此に於て、家庭と聯絡の必要あり、されども、吾人は茲に此の問題を研究せんとするに非ず、茲には學校外に於て講讀する新聞雜誌が、少年の心情に一大影響を與ふることをいはん、新聞雜誌は現實社會の射映なり、社會の善惡は新聞雜誌の手を藉りて個人を感化す、現今社會の善惡は之を知らすと雖、其新聞雜誌に顯はるゝ所、殘酷、無情、野卑、猥褻、詐僞、狡猾、輕躁、嫉妬、爭鬪、亂雜、等倫理壞亂の事實は其大部分を占むるに非ざるか、斯の如き事實によりて世故に慣れざる少年少女の心情を感動せしむ、相率ゐて之に倣はんと欲するは當然なり、誰れか慄然として懼れざるものあらんや。(中畧)子の品行は主として父母其他家庭保護者の重任なりとす、然れども、教師たるものは、心力を竭し、精神を凝らして、絶えず女生の擧動を視察し監督し、家庭との關係を親密ならしむるを計り、以て邪惡の傾向を杜絶するを期すべし、故に彼等の平素購讀せる新聞雜誌を就知するも亦緊要なる事件なるべし、東京府高等女學校に於て、本年六月末日を以て、全校生徒三百六十一人に就きて、常に家庭に於て愛讀せる新聞雜誌を調査せしに、左の如き結果を得たり。

新聞の部

六八	萬朝報	四一	讀賣新聞	三五	朝日新聞
三〇	日本	二九	都新聞	二四	中央新聞
二三	報知新聞	二〇	東京日々新聞	一八	時事新報
一四	毎日新聞	一〇	大和新聞	六	世界の日本
六	國民新聞	四	秋田日々新聞	三	大坂朝日新聞
三	大坂毎日新聞	三	官報		(以下省畧)

雜誌の部

一一四	女鑑	九二	少年世界	六四	太陽
一五	新聲	一五	小國民	一二	家庭雜誌
一二	少年文集	一一	婦人弘道會雜誌	一一	文藝倶樂
九	女學雜誌	八	婦女雜誌	七	女學講義
六	風俗畫報	五	新小説	三	婦人衛生會雜
三	若櫻	三	帝國文學		(以下省畧)

備考。右は概ね家庭に於て父兄の購讀せしものに係り、女鑑、家庭雜誌等數種を除くの外、故らに生徒の購讀せしものなり。

既に生徒の日常愛讀せる新聞雜誌を調査し得たるときは、之に對する學校教師の心得如何、先づ教師は、つとめて其の新聞雜誌を讀み、大体の性質躰裁を就知し。其風教に害あるものは、生徒の爲に摘發して警戒する處あらしめ、且愛讀に於て注意すべき條件を指教し、修身時間は勿論、他科の時間をも利用し、巧妙なる教授法によりて興味を多からしむるを計り、明瞭精緻なる智性を發達せしめ、右愛讀の爲に時間を浪費せしむることなく、好機あらは父兄に告ぐるに自已の意見を以てし、內外力を協せて生徒の品性を確立せしむるを要す。

と、是將に吾人の言はんとせし處なり。實に此の言の如し、日々刊行する新聞雜誌の雜報は、殆んど全く殘酷、卑褻の記事を以て充され、加ふるに、是等

記者が針小棒大の筆は、務めて其の極をうつさんと欲するが如し、是を見るもの、男子と雖も亦其の心動かん。況んや少年婦女子が、之に依りて深く其の胸裡に銘する處のものは、發して如何なる行爲に及ばんか、うつし來る慘憺の光景は、日を逐ふて其の數を加ふるが如し、之或は其の誘發によるものには非ざるか。新聞雜誌の記者たるもの、思ふてこゝに至らば、恐らくば濫りに輕跳の筆を弄する能はざるべし。社會の耳目を以て自ら任ずるもの、宜しく猛省すべきなり。されども、獨り女鑑は、一に賢良淑徳の婦女を養成するを以て任となし、超然として社會の上流に立ち嘗て濁流に染まらず、善行あるものを聞きてはつとめて之を賞揚し、惡行の已むを得ざるものには、之を徴戒す、酸鼻卑猥の事は務めて之を記さず、專ら少年女子の心緒を紊さんことを慮ると仝時に、社會の風俗をして増々善美の域に進めんをつとむ。かくの如くして、號を重ぬることこゝに百四十二、終始一貫嘗て倦怠せず。我か姉妹に愛讀の大多數を占むるも豈亦偶然ならんや。（女鑑愛讀子投す）

●全國教育大會の議題　本月廿五日より三日間、帝國教育會講堂に於いて開かるゝ、全國聯合教育會の議題は、左の數件と定め、地方の各教育會へ向けて之を通知せりと。

地方教育會提出議題選定之分

一小學校脩身科用圖書は全國一樣にする必要なきか（秋田縣教育會提出）

一小學校教科用圖書は國費を以て編纂するの可否（山梨、滋賀教育會提出）

一兒童の就學年齡を七歲よりさするの適否（信濃、愛媛、青森、教育會提出）

一全國聯合教育會を將來に繼續せしむるの可否（秋田、靜岡教育會提出）

一各府縣に地方教育會議を設くるの可否（福岡、東京、山梨教育會提出）

一義務教育を受くる兒童の授業料を全廢する可否（山梨、下野教育會提出）

一學齡兒童保護者にして其義務を懈りたるものを制裁する法を設くる可否（鳥取、山梨、青森教育會提出）

一全國諸學校の學年を一致せしむる件（宮城縣教育會提出）

一尋常中學校の教科目は現行法令及經濟初步の二科目を加ふるの可否（東京、愛媛教育會提出）

一小學校作文教授に於て日用文體を廢するの可否（信濃教育會提出）

一郡視學の俸給旅費を地方費支辨とするの可否（下野教育會提出）

●尙今回の主唱者たる帝國教育會の提出議題を擧ぐれば左の如し

第一　義務教育の年限を延長すると義務教育を普及すると孰れか急務なるか

第二　小學校生徒に地理、歷史、理科の教科書を持たしむるの可否

第三　本邦尋常中學校の教育方法として寄宿舍制を强行するの可否

第四　尋常中學校の入學程度を高むるの可否

●教育家の美德二件　收賄、悖德、不敬、不義、醜聞日に次ぐ今の教育界に、聞くもうれしき談あり。そは、長野縣諏訪郡上諏訪町の塚原淺茅氏といふは、同縣同郡豐平村尋常小學校長なるが、學制頒布以來今日まで二十有五年同校の教育に從事し、嘗て一日も懈怠せず、氏の薰陶を受けたる子弟實に其幾千百なるを知らざるに至りしかど、父兄子弟等は感激措くあたはず、曩に其勞を慰め其功を旌さんとて金二百五十圓を醵金し、一篇の感謝狀を添て氏に贈りたるに、氏はこれを過當なりとて敢て納受せざりしかど、村民等は其中金五十圓を以て三組の銀盃を造りて贈り、又剩餘の金二百圓を以て頌德碑を建設することに決し、村會よりは別に金十圓を贈りたりと。

又、福岡縣小倉高等小學校長杉山貞氏は、多年子弟の教育に從事し、一意專心二十年間一日の如く、氏の薰陶を受けしもの已に萬を超ゆるに至り、其の教育上に於ける功績少からざれど、企救郡に始めて郡

視學を罷く事となりし際にも、後藤郡長等は、杉山氏の適任なる事を認め推擧する處ありしも、堅く辭して應ぜざるより、已むを得ず他に人を求め、任命の手續きも濟みて愈々赴任する塲合に至り、不幸にも死去せしかば、其の後又々杉山氏を推す事とし、再三就任の事を懇請せしも、氏は依然として動かず、今や多年手にかけし學校も漸くに規律立ち完全のものとはなれり、且つ日々相愛し相親しみつゝある數百の兒童を振り捨てゝ郡視學の職に轉ずるは、情に於て忍びざる處なりとて固辭して轉職を肯ぜずと云ふ。斯くてこそ敎育家の本分なるべけれ。

●貞婦孝女賞を受く、　讃州那珂郡本島村の八田うの女は、多年孝養を竭せし廉を以て、本月十日賞勳局より左の如く特例金圓を受けたり。

香川縣讃岐國那珂郡本島村八田權四郎二女

八田うの

資性孝順年甫めて八歳其母惡疾に罹り兩眼明を喪ふや幼弱の身を以て獨力看護し藥餌を進め臭汚を淨め日夜怠らず父衰老して生業を營むこと能はざるに及び餘力賃作して家計を支持し二十年の久き孝養一日の如し洵に奇特とす依て其賞として金二十圓下賜す

又、栃木縣にては、左の旌表あり。

那須郡蘆野町大字蘆野

小山田まつ

資性貞實明治十一年其夫龜五郎中風症に罹り爾來起居自由ならず嗣子耕作は常に妻子を携帶して他に力食し其家計を補助するに足らず家道日に窮乏に陷り飢餓屢迫るに及べり然れども能く意を勵まし勞役傭作に服し僅に糊口の資を得て病夫に奉事

し承親怠らず二十年一日の如し洵に奇特とす依て爲其賞金二圓を下賜す

明治卅年八月十六日　栃木縣知事江木千之

共に孝貞の龜鑑とすべし。

●學童の鑑　淡路國三原郡廣田村に、不動せんといへる婦人あり。又次郎とて、ことし十一才になる子をもてるが、夫は如何せしにや今有らずといふ、身亡せたるにてもあらん。此の又次郎、母に事へて孝養をつくし、おせんも又次郎を力として、貧しき中にも學校へ通はせて、今は尋常四年級となれり。然るに、本年春頃より、おせんは假初ならぬ病に罹り又次郎が必死の看護も其効なく、遂に此程に至りて病死せり、又次郎は跡に殘りて途方にかきくれけるが、此の事早くも廣田小學同年生の聞く所となり、若干宛の醵金をなし、受持敎師の手を經て又次郎へ與へけり、又次郎は日頃世話になる隣家の園田某の助けを得て、僅に野邊の送りを濟ませしも、世に頼むべき唯一人の母を失ひ、跡には自分一人、晝中なれど登校せず、近所の者が夜分は如何にして在るやらんと見舞に行けど、壁の片隅に新しき位牌を立て、草花など手向け、御明しの光にて敎科書の温習をなし居れりと。眞個に可憐の學童にあらずや。

●長壽の夫婦　熊本縣肥後國菊池郡隈府町の宗政八といふは、今年八十七歳の高齢なるが、その妻壽加も八十四歳に達し、共に壯健にして、杖もつかず、眼鏡も用ひず。婦人は、夫を初め、子に、孫に、四季の衣類は手ひとつにて裁縫して、美事にとりまかなひぬ。又夫の政八は、菊池氏以來傳へし、世上に有名なる松囃子といふわざをぎをつとむる家筋にて、一子相傳の藝なれど、本年まで、七十一年の久

しき、毎年懈怠なく、菊池氏沒落後と雖も勤め來しにより、菊池宮司より、左のごとく賞與せられたる壯健の老翁なり。

辭令　宗政八

菊池神社祭典之節古來相傳之松囃子能樂數年間相勤候に付先年被賞置候處其後彌以精勤致し七十一年間無懈怠相勤候儀寳に奇特こす依て目錄之通賞與候事

明治卅年九月十四日

菊池神社宮司從五位男爵　菊池　忠印

目　錄

一金壹圓

宗政八老人の賞典を祝て　佐々　豐水

家の風世々につたへし松はやし
かなつるそでの香こそ深けれ

●產婆生徒及看病法講習生募集　東京市本鄕區元富士町東京帝國大學醫科大學附屬醫院に於て募集するなり。志願のものは、十月十五日までに願書に學業履歷書を添へて願出で、試驗期日に同院に出頭すべきよし。規則書を閲覽せんとする者は、仝院事務室に申出で交付を受くべしと。

產婆生徒

一人　員　四十人(自費)
一年　齡　滿二十二年以上
一試驗期日　十月廿五日午後一時
一試驗科目　一讀書漢字交り文二作文往復書類三算術加減乘除四体格

看病法講習生

一人　員　五十人　內 給費四十人 自費十人
一年　齡　給費生は滿二十三年以上三十五年以下(夫無き者)自費生は年齡と夫の有無とを問はず、
一試驗期日　來る十月二十二日午後一時
一試驗科目　一讀書漢字交り文二作文往復書類三算術加減乘除四体格

●外國人と神習敎　神田今川小路の神習敎本祠に於て、去月祭事を營みしに、內地信者の外、大學御雇ベルツ氏及米國人ヲルデン、及ウード、並にミレット英國人ヘーヤ等の人々參拜し、祭事を拜觀したる上、芳村同敎管長の講議を熱心に聽聞し、幣帛

を供へ、再會を約して歸りたり。或はいふ、これ我國の宗教を視察する爲なりと。

●好奇の結婚　歐米の諸國にては、近頃種々異樣の風を仕組みて婚を結ぶ事流行し、自轉車結婚の事はさきにしるしゝが、尙、風船に乘り、或は水底に沈める破鐘の中、或は樹梢等にても行ひし趣にて、此の程は、獅子の檻内にて結婚の式を擧げたるものありと。奇を好むにも程こそあれ、外人のことながら、聞くもいまはし。

●くに〳〵の挨拶風　知人と途上に行き合ひ、又は其の家に訪問して、先づ發する挨拶は、何れの國にても、大抵全じ意に出づるが如し。されども其の言葉は、國柄によりてれの〳〵一樣ならず。

日耳曼人。運命は如何に汝に伴ふか。
佛蘭西人。汝は如何に自を處するか。
英吉利人。汝は如何にあるか。
獨逸人。如何に汝は暮すか。
魯西亞人。堪忍にあれ。
西班牙人。長命せよ。
支那人。汝は眠食恙なきや。
埃及人。汝は自由に蒸發するや。
波斯人。汝の陰影をして決して縮少せしむることなかれ。
亞剌比亞人。アラーの望むが如く。
ヘブリユー人。平和よ。
羅馬人。勇武にあれ。
希臘人。喜べ。
日本人。今日は。

●米國流の十二支　海外行の玩具追々進歩して、近頃は、動物標本風のもの見事に出來るよしなるが、

之れは型にて動物の形を作り、之に奉書紙を貼り付け、巧みに毛の如く細工して眞の動物の如くするものなり。然るに、從來の製造人は、動物種類の撰擇に困しみ、先づ我國の十二支を作り、之を一ダース宛にして送り試みしに、大花主なる米國にては其内氣に入らぬものありとて修正の上注文し越したるが、其十二支は

丑　寅　卯　午　未　申　戌　亥　熊　狸　鹿
獅

なり、商人は之を米國流の十二支といへりと、其價格は一ダース二十五錢乃至五十錢位

●アルコールの人躰に及ぼす害　西洋の或る醫學者が、アルコールの人身に及ぼす利害に關し、二千人以上に就き試驗したる結果、アルコールの全く有害なることを發見せり。其所説に據れば、一神經の作用を削減し、二腦を痛め、三知覺力を殺ぎ、四筋力を弱くし、五著しく消化力を減ずといふに在りて、アルコールは全く人躰の組織力を失はしむる者と斷定し、尚世間にては、アルコールは胃の消化力を助くる物の如くに信ずる者あれども、決して然らずといへりき。

●時の花　秋の七草も、はや色香あせたり、今盛りなるは菊になん。東京にては例によりて、團子坂、淺草花屋敷、染井、目黑、廣尾の笑花園、等何れも好き見處なり。日曜の日など、學びの友どちうちつれていでたち、清き薫りに心の塵を拂はんは、最も好き散策ならんかし。





教の庭

十月五日兼題　籬菊

天

かりそめにゆひし籬をしらきくの
千代としめとも咲きにけるかな　福岡縣筑紫郡警固村菊院　東野けい子

地

ゆひかへであれしまゝなる袖垣を
咲きてつくろふしらきくの花　伊勢國飯南郡櫛田村　近藤ふく子

人

なかなかにあはれとぞ見る野分して
あれしまかきに匂ふしらきく　福岡縣福岡市天神町　江口とみの子

秀逸（十五首）

露くめむ老てふこともしらきくの
花さきつゞくにはのませがき　木川里子

いろいろの露をかざしてませ垣に
にほひこぼるゝ菊の八千もと　佐々小琴子

ふるさとのあれしまかきの菊の花
さてもやつれぬ香ににほふ哉　永井さい子

なかなかにさかりひさしく匂ふ哉
しつがかきねのきくのひと本　住山幾子

おく霜にいよいよきよき色みえて
まかきにゝほふしらきくの花　稲田松枝子

むくらはふまかきの中に咲けれとも
にほひかくれぬしらきくの花　名取正代子

露たにもあたにはおかぬ色見えて
たけのまかきにさけるしら菊　前澤繁子

仙人のうゑやしにけむおのつから
千代の色あるませのしらきく　磯野たま子

つくろはぬにはの籬もみえぬまて
咲きそふ菊のはなそゆかしき　河田いし子

かりそめのまかきなれとも白菊の
花は千とせのいろにさきけり　仁保しま子

主やたれうきよ隔つるしはかきに　伊井とま子

けたかくにほふしらきくの花

寒からぬ雪やつもると見ゆるまで
まかきにあまるしらきくの花　眞島千鶴子

この秋も色うるはしく咲きにけり
まかきに植ゑしちよの志ら菊　香川　顯子

ところせき庭にあまりて匂ふかな
まかきのもとの志らくの花　金原　吉子

とりどりにをかしき色に匂ふかな
まかきの本のきゝくしらきく　内藤　斐子

（以下原稿到着順）

ませのうちに秋をふかめてさくきくは
おくつゆさへもにほひぬるかな　佐々有鄰子

あさなあさなおくしら露にいろそへて
まかきのきくのなかめひさしも　高島　蕗子

見わたせはにはの千草は枯れはてゝ
いまをさかりさにほふきくかな　上島　龍子

いくあきか庭のまかきにあきこめて
にほひつきせぬしらきくのはな　笹山みち子

あきごとにいろもにほひも増りつゝ
千代のまかきにさけるしらきく　神田　樂子

色も香も去年よりまさるこゝちして
みれさもあかぬにはのしらきく　神田　鈴子

あさかほのつるのみ殘るまかきより
いまをさかりさにほふしらきく　西村　虎子

姫つたのきしきおりたすまかきより
あやさりさけるしらきくのはな　野田千代子

さきにほふまかきの菊のさかりころ
きみかちとせのかさしなりけり　木村　衆子

しめ結ひしはたれさもしらきくの
にほふまかきそゆかしかりける　西村　芳子

くれたけの千代のまかきに秋こめて
さかりひさしきしらきくのはな　神田　靜子

きみかよの千歳のあきを契りおきて
にほひゆかしくさけるしらきく　楠　精子

つゆむすふ庭のまかきのきくのはな
千代もかはらぬすかたなりけり　島田　好子

荒れはてしまかきに菊は咲きたれさ
たかきにほひはかはらさりけり　荒井　波子

さかつきのそれかさまかふ白きくは
ぬしやたれなるつまのそてかき　近藤　秀子

ませかきに移し栽ゑたるきくのはな
いまをさかりさきにほふらん　青木　繁子

よのうさを隔つかきれに千代こめて
かをりゆかしくさけるしらきく　高橋　信子

やまひさの杖にたよりて立つままに
にたるまかきのしらきくのはな　秋園　露子

たかために咲き匂ふらんきくのはな
とふひともなきやとのまかきに　白井玉子

しつかやの籬のきくの咲きしより
おもはぬひとの訪ふそうれしき　秋園喜久子

あさまたきまかきの菊のさきしより
訪ひくるひとの今日も絶えせぬ　細井糸子

おくつゆも千代のちきりや結ふらん
まかきにさけるしらきくのはな　溝口信子

つくろはぬさまこそよけれ賤かやの
まかきにさけるしらきくのはな　成田延子

かならすは知らてすきまし賤かやの
あれしまかきにさけるしらきく　水島艮子

千くさみなかれていろなき垣のへに
うつろふことなきしらきくのはな　松原常子

はなさいへはなへて仇なるものなるに
まかきのきくのいろそひさしき　芝田源子

此のころはしつかまかきも賑はしく
咲きにほふなりしらきくのはな　吉川貞子

くれ竹に千代をきそひてにほふなり
まかきにあまる八重のむらきく　吉川くに子

てらす日のかけもにほふと思ふまて
咲きてうれしきしらきくのはな　中島房子

いたつらにうつし植ゑにし籬にも
いまをさかりとさけるしらきく　青山峯子

いたつらにすさひに植ゑし花なれと
さかりひさしやかきのしらきく　澤田俊子

春へよりうつしうゑたるかひありて
かをりゆかしきかきのしらきく　小川金子

ふりつもる雪かと見れはそれならて
いまをさかりのかきのしらきく　小川富子

立ちよれはころもの袖もかをるなり
しかきのきくのにほふ此のころ　園田遊賀子

あき草はうつろひはてしまかきにも
ひとりのこりてにほふきくかな　大森純子

折るもをし折らぬもつらし枯はてし
まかきにさけるしらきくのはな　大島あい子

ものことのひらけゆく世に今もなほ
むかしのまゝのかきのしらきく　溝口直子

すみそめのたそかれ時になりぬれは
ゆきかとみゆるかきのしらきく　溝口惠喜子

みちならぬたのしみよりは賤かやの
まかきのきくを見るそたのしき　遠藤千勢子

きのふまてありし草木はかれはてゝ
いつかまかきにしらきくのさく　西村佳子

物音もしつまりはてゝふくるよに
にほふまかきのしらきくのはな　長島あや子

しかめやも秋のちくさのはなのいろも
まかきの下のきくのひとゐた　越山雪子

そまひとの斧の柄朽ちしまかきには
よをしらきくのはなそのこれる　吉川勝子

わきも子かまかきに匂ふきくのはな
しらつゆなから手折りてもみん　細井糸子

さのみとふひとこそなけれ志つかやも
おなしまかきのしらきくのはな　荒木らま子

つくろはぬ籬のもとにおのつから
千代をしめたるしらきくのはな　西川順子

見れとあかぬまかきのもとのむら菊を
なりてかさゝん千代のかさしに　深草みどり子

はつ霜のおきしと見れはましろなる
まかきのもとのきくにうありける　菫野露子

おく霜のいろもまびしきまかきには
千代のゆかりのきくそさきける　錦織幸子

白きくはまかきのもとににほふなり
秋のけしきを知らせかほにも　右田藤子

きくの花さきにけらしなきのふけふ
ませのひまよりもるゝゆかし香　福原菫子

花もかもそとにもれけりやれかゝる
まかきにさけるきくのひともと　稲田秀子

おのつからまかきの端に咲きそめし
きくこそはなのこゝろなるらめ　竹内賴子

咲きかゝるまかきの菊のゆかしさに
しつかふせやも世にしられけり　坂田きみ子

すゝみゆく御代のためしかしら菊の
しつかまかきに咲きに匂ふなり　壺井みき子

うつし植ゑしまかきの菊の咲きしより
おいてふことも忘れけるかな　高橋てる子

千代ふへき色こそみゆれくれたけの
まかきのもとのしらきくのはな　降田まき子

かれてよりさかり久しききくのはな
まかきのたけの千代やならへる　石川類子

此のころは秋のあはれもわすれけり
まかきのきくのさきそめしより　石川樂子

きくのはな匂ふかきりは庭のおもの
まかきのたけにわれ成りてしか　石川久子

君か代のこれや千とせのかげならん
まかきに匂ふしらきくのはな　前澤幸子

賤か家のかきねに匂ふきくのはな
つゆのひかりにいろまさりけり　前澤里佐子

千世かけて色うるはしくさきにけり
まかきに匂ふしらきくのはな　赤沼孝惠子

さかりなるまかきの下のきくのはな
ゐたおもけにもさきにけるかな　長山孝子

すみわひしまがきに匂ふしらぎくの
はなはあるじのこゝろなるらん　矢島ゐい子

けさ見れはまながら霜をいたゝきて
　まがきににほふしらきくのはな　安井うめ子

香ににほふ君かめぐみにうるほひて
　まかきのきくのはなさきにけり　小野田八重子

手折らんと思ふこゝろもたゆたひぬ
　まかきにさけるしらきくのはな　田中ひろ子

中〳〵にいさまなくして打ちすてし
　まかきのきくそさかりひさしき　金森さし子

夜もすから枕にちかくかよふ香は
　まかきにうゑしきくのひともと　森山英子

色もかもなつかしきかなつゆふかき
　まかきにさけるしらきくのはな　小野寺竹子

こぞうゑしまかきの菊のさきそめて
　たならぬそてもうちかをるなり　綿野りき子

咲きしより日數ふれともなか〳〵に
　見るもたのしきませのしらきく　磯野こと子

さり〳〵におのか色香をきそひつゝ
　まかきににほふ八重のたまきく　美奈井芳子

わかやどのまかきのもとのしら菊は
　まどのうちまてにほひけるかな　青木春子

幾あきをすくしきつらむわかやどて
　いまやまかきににほふしらきく　吾妻近子

立ちよりし君かまそてもにほふまて
　まかきのきくの咲きにけるかな　綿脇ますこ

千代ふへき根をしもみねてつゆしもに
　かほりもあせぬませのしらきく　藤井くら子

移しうゑしまかきのきくはおのつから
　千とせのいろをみするなりけり　柳田里子

幾千代とおもひをこめてつちかひし
　まかきのきくのさきにけるかな　池谷富子

わかやどてませに咲けともきくの花
　いく世すきゝし根ざしなるらむ　小曾根しう子

しめゆひしまかきのきくの盛りには
　となりのやどもはなの香そする　木村みつ子

七重八重千代をかさねてしらきくの
　まかきににほふはなそひさしき　木村きく子

かいま見しまかきの菊はつれなくて
　そてにうつれる香にそ引かるゝ　田中ねん子

霜しろきまかきのもとのきくのはな
　くれゆくあきをとゝめかほなる　西艶子

百草のはなのさちめとうつくしく
　つゆのまかきににほふしらきく　中山かす子

秋ふゆのへたてもしらてにほふかな
　まかきのきくのさかりひさしく　羽田三緒子

この秋もわすれすさけるしらきくに
　まかきもにほふこゝちこそすれ　大條和久利子

つくろはぬ庭のまかきにさくきくの
　かをりゆかしきあさのふけふかな　富士村幾子

我かさのまかきの菊のさきしより
うさきひささへすきかてにして　富士村　ひさ子

見れさあかぬ匂ひなりけり千代かけて
まかきににほふしらきくのはな　中山　さみ子

あれはてし賤かふせやのまかきにも
にほひゆかしきしらきくのはな　橋本　たつ子

年をへしたけのまかきのしらきくは
千代のかをりやきそふなるらむ　長山　禎子

ませかきも埋るゝはかり咲にける
ゆきのいろなるしらきくのはな　山本　昭子

賤かやのゆひつくろはぬたけかきに
ゆかしくさけるしらきくのはな　山本　のふ子

つくろはぬ賤かふせやのやれかきに
ゆかしくにほふしらきくのはな　讀人知れす

かならすはゆきさそ見まし月きよき
よるのまかきのしらきくのはな　穂積　稔子

うつろはぬ色にもあきの千代こめて
つゆのまかきににほふしらきく　氏家　さも云子

おく露に咲きいてにけりきくのはな
千代こそにほへたけのまかきに　氏家　はな子

ゆかしくも露のまかきにさき出てゝ
さかりひさしきしらきくのはな　宮澤　その子

あさきりのまかきにさきししらきくは
ゆふへのつきにひかりそふなり　宮澤　たけ子

手折らむさたちよる袖もにほふなり
まかきにさけるしらきくのはな　萩野　秋子

やれはてしまかきなからもきくのはな
いろかゆかしく咲きいてにけり　堀西　光子

こゝろなき露さおきつゝへたてなく
めつるまかきのしらきくのはな　中村　正子

志つか家のかきねの菊の咲きてより
いふせきにはもゆかしけに見ゆ　春野　梅子

かれてゆく千草にひさりおくれゐて
かきねにゝほふしらきくのはな　失名

こゝろある人に志られすしつか家の
まかきかもさに咲けるしらきく　山手　てい子

この秋もいろうろはしくさきにけり
にはのまかきのしらきくのはな　白石　梅子

曇る夜もさやけかりけりませかきに
咲くしらきくのはなのあたりは　白石　まさ子

咲きそめしまかきのきくの花の香に
にほひおくれぬこさのはもかな　弘田　ゆき子

へたてにし野邊のまかきを八千草の
はなのさちめに咲ける志らきく　大寺　濱遠子

なか垣にうゑはしつれさしらきくの
はなにはひさをへたてさりけり　薬師寺　壽子

さまゝゝににほふまかきのきくの花
いくあきかけてさきにほふらん　北村　左枝子

たゝひさへへたてど八重に匂ふなり
　まかきにさけるしらきくのはな　北村てい子

わかやさのまかきににほふしらきくの
　はなこそちよのいろかなりけれ　北村孝子

なるそてもぬれては千代もにほふらん
　まかきのきくのはなのしらつゆ　宇多田楊子

時ならぬゆきやふりしさおもふまて
　まかきにさけるしらきくのはな　山本秀子

やかてこのまかきの菊もうつろはゝ
　ひさめもかれんわかやまささは　山本能子

しめゆひし妹かまかきのきくのはな
　たれにおもひのつゆやおくらん　日高かず子

賤かやのかきのやふれの見ゐぬまて
　さきみたれけりしらきくのはな　山根久子

もみちせんこすゑまたるゝ頃ながら
　まかきのきくのなつかしきかな　吉村ふて子

あけはてし夜のまかきにほしのかけ
　のこるさ見れはにほふしらきく　上原能夫子

うつし植ゑしにはのまかきの菊のはな
　ことしそちよのはしめなりける　下元茂登子

朝ゆふにめかれすめてんまかきなは
　ゆひてつくれるしらきくのはな　宇高松子

うれしくもさき出にけり我かうゑし
　にはのまかきのしらきくのはな　上野君子

うすくこく花さき出てゝませかきに
　にほひなそふるにはのむらきく　近藤よし子

手なるへきねたこそなけれなつかしく
　まかきににほふしらきくのはな　宮地琴子

八重草のしもかれ果つるませの内に
　きくははなこそ咲き初めにけれ　内藤貞子

ことしはさはるなつかけて培ひし
　ませのしらきくはなさきにけり　内藤小夜子

つゆしもに千させのあきの色そひて
　にほふまかきのしらきくのはな　東野さく子

もゝくさはやつるゝにはの垣のねに
　長閑にひさりさけるしらきく　弘田しも子

こゝろしてつゆさへおくか朝またき
　なりまさひけりませのしらきく　伊東美代子

限りなきあきなかされんきくのはな
　まかきなちよのやさりにはして　松尾萱子

のさかなる朝日のかけにてりそひて
　かきねににほふしらきくのはな　石川助子

置く露にいろかなそへてきくのはな
　かきの内外に咲きにけるかな　石川さく子

この秋もいろうるはしくませの内に
　千代のかさしのきくはさきけり　戸塚鉄子

千代さいふ菊なまかきに植ゑたれは
　きみかよはひうひさしかるへき　中桐杏子

秋ことににほひかはらすさきいつる
　まかきのきくのいろそめてたき　植木さよ子

みやひともよりてや見まし賤か家の
　まかきににほふしらきくのはな　萩原章子

十月五日兼題　祖先の祭日に友を招く文

天　下總國猿島郡古河町字櫻町　中村正子

秋もやう〳〵夜寒になりて、虫の聲々よわりゆくものがなしさ、いかに過させ給ふらむ、心もとなくこそ。ゆく年月には關守なく、昨日といひ、けふとくらして、飛鳥川の、ながれ早き理りにもれず、來ん十日は、高祖父が、五十年にあたりぬ。者たらぬ山里に、年ふりて、有にもあらぬ身にしあれど、薪こるひま〳〵木の葉かく暇々には、さすがに祖先のめぐみ、忘れがたく侍れど、いかで心あひの友達を、うちつどへて、高祖父がこよなう、好みし歌のくさ〳〵たむけつゝ、かたばかりに、そが祭とり行はんと、かれこれ招ぎきつるを、そこには障る事もおはせずや、もとよりいさゝ小川のいささけき心なれど、くみしる人もと、きこえさするを、ふりはへさせ給ひてよ。千秋を過す心地して朝夕待ちきこえ侍るにこそ穴賢。

地　福岡縣筑紫郡警固村　吉村ふて子

いつしかと待ち侍りし七草のやう〳〵けしきはみたるかにくからず侍れと、かく奥まりたるかくれ家は、とふ人さへも侍らねど、花のためいとはしくれはえ侍りしに、あすなむれのか家の遠つ祖の三百年の祭し侍れは、うからをつどへ、心ばかりのわざいとなみ侍らんと思ひ侍るに、世々のいひつたへにも、この人は管絃の道をこよなう好み侍りしより、幸ひこの頃わがならひ侍る師をこひて、合奏をもなして、手向け侍らむやと思ひ侍れど、君には、この道に名高うおはしませど、うひ〳〵しき中にかしこう侍れと、妹の君をもともなはせ玉ひて、わたらせ玉はらは、いかにとぶらひにもなり侍らむを、いかて〳〵、御車まけさせ玉はせては、まつひしのまちわたる友をあはれとおぼしめさは、いとうれしうなむかしこ。

人　東京青山原宿百四十二番地　大寺浪速子

秋もやゝふけゆくまゝに、野べに名殘の虫の音も、いと物かなしう、そゞろに昔の忍ばるゝ折しも、神無月にちなめるとにはあらねど、先つころも、ちら

と聞ゆあげつる我が亡き祖父が四十年の祭日も、いよ〳〵明後日にせまりぬれど、いまは昔となりぬれど、世の中いたくさわがしくみだれたる厤もたゞならざるそのころ、祖父には皇室の式微をうれひ奉りて、己れの身を打忘れ、ひたすら大君に盡しぬる泟どに、終に幕府のためにいみきらはれて、志のなかばにれもはずもはかなくなりたまひぬ、われ等は、その面影をも見まり侍らねど、そが御いさをは常に聞きしり侍り、こたびうからやから、殊に其の頃より生き殘りて、祖父の親しかりし友だち等さへ打集ひ、我が家にて、右の祭事をいとなみ侍らんとす、されど、日頃いとねもごろに交らひふかき君にも、此むしろにつらなりたまはん事の願はしうれさはりもれはせずど、當日正午一時に打揃ふはずにつき、其の御心にて、臨ませたまひてよ、自らまゐ出て、此よし聞ゆあぐべきなれど、取りあへず文にて申述べまゐらせぬ、無禮のほどは、みゆるしたまひてよ、あなかしこ。

（以下原稿到着順）

佐々有鄰子

源のきよき流をくみて、歴世人に用ゐられしわが家は、祖先の勳功によるものから、末代の姿が猶も、今日の神靈祭を執行せでやはあるべき。うからやから、且は舊臣の人々をも呼つどへて、山海の種々のものを供へ、當時祖先のきみの、越の國の雪中さらさら越の昔をかたり、まづはたを織田の大臣に忠義をつくしたまひ、朝日の豐臣のきみに赤心をあらはしましゝふるごとを忍びで、神酒くみかはすむしろに侍れば、かねて心へだてぬ友がきの君たちに、心ばかりの直會のもの參らんと欲すれば、午後より御車をきしらせ給へ、此ことききこゆあげまく、女童を使かれにしてかくなん、御返事待ち奉る、穴賢。

右田藤子

明後日は遠祖の祭日にて、いつも身うちの人のみつどひ侍りしが、今年はへたてなき友たちも集ひくるよしなれば常々親しく同じ學の窓にむつみつるあなた樣を始めたれかれ、二三の人をも打招き申候、就ては明後日は幸ひ日曜日にも當り候へば、御繰り合せ、晝頃御出て被下度、御待ち申上候、先は御伺ひのみ、あら〳〵かしこ。

福原蓋子

わすは、我が代々の、御親の、たま祭りの日に、侍れば、いさゝか、供養して、うからやから、へだてなき友ごちなど呼び迎へ、のりのわざ、たのみ聞ゆまつらまほしうなん、よしや君には、外樣に繁事のおはしますとも、まげて、御車をめぐらし給ひてよ。古き苔の下よりも、さこそうれしくよろこばしくや、思ひ侍らん。

江口さみの子

明日は遠つ親の靈祭し侍るに、かれて家のいひ傳へに、世に侍りしとき、敷島の道に志深う侍りし由なれは、こたびはこの道のらう〳〵しき師に乞て、古今集のかうせちをねがひ、かの靈をもなぐさめ、後は懷舊の歌をもよみいでゝ、手向たう、彼や是やかたらひ合せまほしき事も侍れば、朝のまよりわたらせ給はせてよ。又文臺、かされ硯、かし給へかし、これまうのぼりてれぎ參らんと思ひ侍れど、明日の急

ぎにまぎれて、拙き筆もてきこゆ上ぐるを、許させ給へや、かしこ。

高橋きん子

露にあらしに紅葉して、四方の梢は錦なせど、籬の菊もやゝ衰へ、雲間をわたる雁の音も、あはれをそへて、物淋しき、長月の末となりたる折から、御許には、いさゝねぐしく入らせられ、こよなうめでたくなん。抑あすは、遠つ祖の祭にて、させるいとなみも侍られど、靈に供へん物をまゐらせたう思ひ侍れば、御子たち召つれ、午前十一時頃より出でさせられんことを、玉襷かけて願ひまをすになん。且隣ほとりの友をも招きよせんほどに、此頃久しく打ちたゆし物がたりは、おん目もじにこまぐくまをし上げさむらはん、かしこ、たのしみといふ樂しみは代々のおやの深きめぐみのたまものにこそ

臼井さな子

秋風の木の葉をさそふにつけて、あはれかゝる頃なりしかと、はかなくなりにし祖母のわすられぬ折から、いとゞしく面影にたちて、露けきのみまさるまゝに、數ふれば、はやあさてはみとせに當り侍れば、いかでそが靈まつらばや、さるには、祖母のながらへし頃より、親しみまゐらせし君のいらせ給はゞ、なき靈も、いかにうれしう思うらん、あれまさる淺茅が露をいとひ給はで、しばしなぐさめ給はんことを、切に願ひまゐらするになん、かしこ。

山手てい子

よろづ物淋しきは、秋の日のならひに侍るを、御許には、昨日今日、如何渡らせたまふらん。此頃は、絶て御けしき伺ひまつらず、なめげのつみは、幾重にも、御ゆるしたまひてよ。さても此月十七日は知らせ玉ふやうに、祖父の命日に當り、例年こゝろばかりの法會いとなみ居侍りしを、今年は、祖先の百年祭あはせ行ふつもりなれば御許は、いとも古きよりのゆかりにはべれば、當日は是非とも御出ましの上、よろづ御さしづをも賜はりたくねんじ侍る、しめりがちなるむしろとて、御心ゆかせたまはぬは、御ゆるしたまひてよ、かしこ。

弘田ゆき子

暮るゝに間なき秋の夕、ふり出でゝ鳴く虫の聲々のあはれとは、いかに聞きなし給ふらん、さて今年も、常のためしにならひ、明日なん遠つ祖の靈祭りし侍らむとて、やからの誰彼あないし置きつれど、知らせ給へる如く、男子達は皆學びの庭に出でたちつれば、さた過ぎたる刀自ばかりにて、何のむづかしきもおはしまさざるべければ、うちよりて今をさかりに咲匂ふ老白菊を、御國詞にしらべ出でばやなど、思ひ侍るを、一つ園生に行きかよふ中にも、取りわき親しくむつびまゐらするゆかりもて、御車よせ給ひなむ事を、せちにこひのみ侍るになん、かしこ。

宇多田やう子

秋もやゝ更け行くまゝに、草葉にすだく虫の音、片山里の鹿の聲、いづれもあはれを添へざるものやはある、まして今年は、我家をたてし遠つ親の過ぎましゝより三百年に當りぬれば、そが書き遺されし言の葉、また代々傳へ來し遺物を見るにつけても、今更の心地して、中々に懷はしく忍ばれてなん、近き此の長月十五日は、そが身まかりし日なれば、魂祭仕へ奉らんと、うからやからを初め、親しき友だち呼びつどへ、海山河野の種々の物、且つは大和歌など備へ奉りて、聊か慰めまほしく思ふなり、君もあはれと思しめし給はゞ、御車めぐらして、このむしろの光りそへ給ひてよかし、あなかしこ。

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すへし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無郵送料		

明治三十年十月三日印刷
同年十月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 川崎直衞

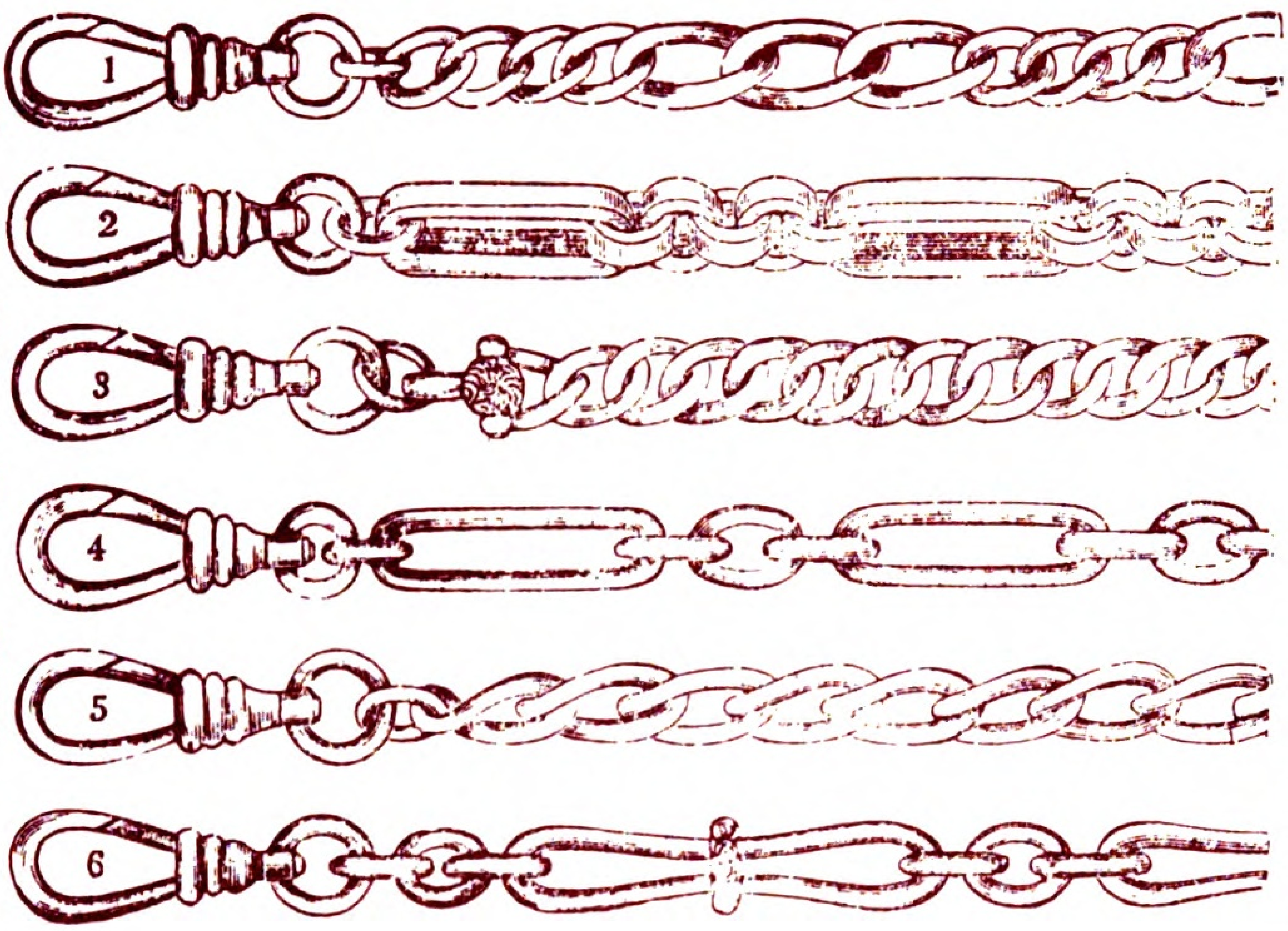
東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人 並木艮雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所（電話番號本局八八）國光社

〔明治二十四年八月四日內務省認可〕
〔明治二十五年三月十[illegible]日遞信省許可〕

最上等金着時計鎖

天賞堂特別注文米國製造新形着荷



此特約注文新形鎖は

◎一號……價二十圓
◎二號……價二十三圓
◎三號……價二十二圓
◎四號……價二十五圓
◎五號……價十八圓
◎六號……價二十七圓

（市外遞送料金十六錢）

（保證年限三十ヶ年）

金着なれば世間にありふれたる鍍金にあらず**金位**十四金の延板を以て一体を包み磨擦る所は殊更厚く着せたれば剝脱こと無きは勿論**金色**は十八金の純金に異なる所なく其光彩は却て普通の金位より宜く量も亦頗る重し且つ如何なる品に觸るゝとも更に變色する憂も決して無し變色することと無し**恰好**は米國流行の新形中にて殊更我國の好尚に適應するものを選びて製作せしめたり**保證**は普通舶來の金着鎖には無きが例なれども此鎖には米國製造會社の極印ありて其金位および金量をも極印して保證したり**二重保證**本堂は其上にまた本堂の保證を加へて其確實なるを請合ふなり

本堂特別注文新形金着懷中時計と此鎖とは取分て注意を厚くしたる新形確實の品なれば本堂または各出張所または各特約販賣店にて御覽ありて尊慮に適ひたらば御購求あらせ玉へ



妙技一賞牌

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地

時計及寶玉類
貴金屬美術品商（電話番號本局三百三十三）

天賞堂

東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）

天賞堂小川町出張所

大坂市南區心齋橋北詰北ニ入ル（電話番號七百三十三）

天賞堂大坂出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番戸
天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂廣島出張所

熊本市唐人町上通鍛冶屋町十番地
天賞堂熊本出張所

長崎市萬歳町上野屋方
天賞堂長崎臨時出張所

北海道小樽色內町越中屋方
天賞堂小樽臨時出張所

（印刷所　東京國光社印刷所）